

東京商科大學
一橋山岳部年報

Nr. 1

1925 (4—10)

目次

祝発刊之辞 …… 木村恵吉郎 …… 一
一摘山缶部に寄する …… 藤原敏 …… 二
山と人生 …… 中川孫一 …… 五
山缶偶感 …… 松倉栄司 …… 七
断想 …… 中島滋 …… 十二
歌 …… 村尾金二 …… 十七
小品二題 …… 矢竹泰雄 …… 二十四
紀行 …… 松崎武雄 …… 二十七
山讃賦 …… 渡辺九郎 …… 二十九
秋父國境山脈縦走に就いて …… 吉沢一郎 …… 三十三
岩菅入キー初登攀 …… 渡辺謙三 …… 三十五
武尊より茂倉 …… 吉沢一郎 …… 三十七
大真名子小真名子をへて戦場原へ …… 松本謙三 …… 三十七
登沢遡行 …… 渡辺九郎 …… 四十一
白峯三山 …… 吉沢一郎 …… 四十一
小西係遺難 …… 小栗吉雄 …… 五十五
槍から穂高へ …… 小栗吉雄 …… 五十八
中秋の八ヶ岳 …… 矢作太郎 …… 六十六
日光より平ヶ岳 …… 小栗吉雄 …… 七十六
雪の清水尾 …… 松木三謙 …… 八十三
年報 …… 松木謙三 …… 八十八

祝發刊之辭

一橋山岳部々長　教授　木村惠吉郎

近年我國の青年拳生の間に、殊に青年拳生の登山趣味の次第に普及しつゝある事に、吾人の大に歡迎し、益〻奬勵せんと欲する所なり。都會に生れて、登山、の愛好者漸く增加し、お給流を涉る事に依て鍛錬さるゝ強固なる身體、其峻嶺を攀ぢる剛健の氣象、用意周到綿密なる計劃と其實行とに依て練らるゝ思慮判斷、等の事は將來社會に立て大に活動せんとする青年拳生の必ず異備すべき緊要なる資格にして、登山は實に此等の事を屢〻する事に依て自ら修養し得る所のものなり。若夫れ俗塵を遁れて美はしき自然の懷抱に陶醉し、科拳と物價の世界を離れて大自然の偉大なる力を感得し、深奥なる宇宙の神祕を默感して忘我の境に逍遙する心境にして、不知不識の間に登山趣味の普及を奬勵せんとするが如きに至つては、登山者の獨り味ひ得る美妙なる心境にして、不知不識の間に吾人の心を淨化し氣宇を高大ならしめ人格を高尚ならしむるものなり。

吾人が青年拳生の登山趣味の普及を奬勵せんとする豈に故なしとせんや。

然れ共登山の事たる決して軽々に試むべきに非ず。周到なる用意と綿密なる調査を俟って後に決行するにあらずんば時に不測の危害を招く恨なくして恐るべきは山岳なり。

吾が山岳部に肉する研究、調査、登山の紀行感想等を輯録して共の益する所尠少にあらざるべし。茲に謹んで卑見を陳して祝詞となし、将来の発展を祈る。

橋山岳部に寄する

山は荒れよと雪ふかゝろと
わたしや一橋のあゝアルピニスト
山をくだれば茨がとめる
茨は存しやれあゝ日がくれる
恋も知らうに慈母よ
胸のあゝやは毛のあらをとめ雪

藤原敏

飛北陽ざしが大食越えて（おほばみ）
　よいよい夜みちのあらを収がたひ
氷雨（いざめ）さらさらふらうとまゝよ
　春の雪解（ゆきげ）にやあら浅みどり

梓川ならば流しもしよか
　ぬしへたよりをあらはづかしや

こゝは徳本（とくごう）・穂高よさらば
　泣いて降りましよあら島々へ

風にゆれゆれ尾花がなびく
　槍の月夜があらおひしかろ

山と人生

中川孫一

山は私にとって生涯忘れる事の出来ない「永久の恋人」である。力と愛と悦とを私は何時も山から与えられた。心の「ふるさと」それは、永劫無限にそゝり立ってゐる彼の山岳である。山を懐しむ心！　何時も慈母の懐に抱かれてゐる幼児の様な心持！　何も言はない其山の姿が私を慌らなく感奮させる。私も亦山岳宗の一徒に過ぎないのだ。

○

赤城には早や秋が訪れて来た。憲まれた私達の天幕生活のはての日も、もう明日一日に迫ってゐた。再び帰ることはどんなにか私達を悲ませたらう、と、大沼湖畔の白樺の下の七枚が限りなく情まれた。

　芙蓉の月は嘗て経験した事がない程冴え渡ってゐた。

ケ渓からも仰ぎ見た。白樺の樹林からも仰いだ。

が、、屋夜にクッキリ浮彫の様に浮み出てゐる事だ

動の薄上って赤城のをどうすることも出来なかった。

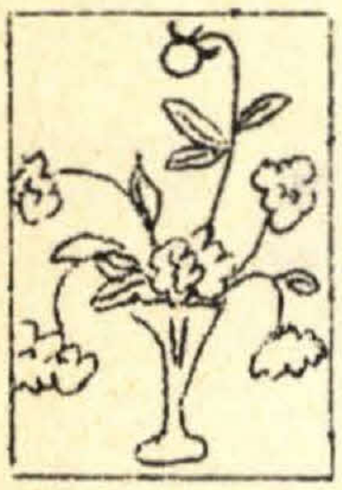
道を、剛梁のあ尾根伝ひに登っていった。放飼の牛や馬が、、突然の侵入者に驚きの眼をみは

ってゐた。やがて頂上の三角点にたどりつくと、遥に明滅する高崎市の燈火と、中空に浮ん返ってゐる月とが与えた印象は永久に忘れる事が出来ない。万籟寂としてしい鼓動ばかり。鏡の様に澄み渡った小沼と、夜目にもしるき月影こそ、永劫忘れる事の出来ない、美と壮と怪まれるやうな激しい感情、月は冴えに守る月影と、高壁の様な長と何とも形容の出来ない、悦の戦慄が全身に伝った。山頂の月！　初秋の深き大自然はかるく自分の身内に浴けこんで呉くかと感激の山の姿であった。

○

御嶽はもう晩秋に近かった。奥の院から望んだ雄偉な大嶽の姿が、強くみやう！路を西南にとると私はゆるやかな尾根道を唯一人急いだ。雑木林にて居た。カサコソ〳〵踏ケしめ〳〵する落葉の音が何とも言へない淋しびれる様な静寂の境地に私を引入れた。数瞬の音をそこに驚いたに翼音のみが力ソコソ〳〵と響く。私は大自然の尺称に思った。

大嶽山頂は漾々たる白雲の世界であった。ぢっと耳をすませば、何も聴えない。唯漠々たる大自然の懐に抱かれる！うづく様な旋律が全身に伝はってゆくのがはっきりと判った。



山岳偶感

松倉栄司

誰に誇らう筈でもない。唯抑えされないの内部衝動と、人一倍の負じ魂に動かされて前穂高の一枚岩をよぢたのであった。溺没せる一切の世俗意識を忘れ、対他の醜き外観を去って、貴い生命を自己の信頼する手足に托して鬼塞の絶壁に密着しつゝ攀登り、這下つた其貴い経験を永劫無言の山岳と語り合ふ時、アルピニストは始めて自己生命の躍動を認め、崇高無限の大岳のために全生命を奉仕して悔ひない。私の登高行の第一年の記録は右の称に詰る。

千古谷越を知らない処女林、氷雪に埋れたピーク、其処に大自然の姿を見、山の「ことば」を聴くために、重いリュツク、ザックに押し潰され乍ら自分は登ってゆくのだ。人間の「言葉」を以て表し得ない感激と価値とを見出すためにに自分は登ってゆくのだ。

四季を通じて、何時にてもあれ、群青にかすむ、遠山脈を西郊に望む時、その窺知し得ない神秘の世界であるの山の魅力は、体経者以外に脱座して礼拝した。

渓谷の流れた肌に大自然の力強さを示して山は
根強さを思ふ。山は人に迫り・人は山に迫らる。そこにはもう幼時放へ
童話の中で感じられた山の温情さは無いとある男は嘆息するが実はその
妥協と譲歩とを山にまで要求して居る事を知らずに居る。兎と亀の競走
打算は妥協と譲歩との即親炎だ。銀等の競走は山と一緒になって一つの
イメージを作って呉れる。俗生活とは没交渉なシーンを見せて呉れる。
たのだ。だから世間で、さういふ事なら桃太郎の鬼ケ島征伐の鬼が假睡したから負け
は迷惑千万な話で山には関係のない打算的な俗事だ。兎と亀に
夢は鬼ケ島征伐と財宝が眼の前にぶらさげられてこれが放
しいだらうと見せ付けられる様なものだ。そこには打算が仕組まれて居
ある桃太郎の話の方が結局いゝでと思はせる。

鬼と亀の話に思深められない男は暮にまかれた時に自らの仕事を専廉
て極端には自分の還境から光明を自ら奪って了ふ。山行は決して労力と
ない。それを取てするものは丁度鬼ケ島へ行って鬼と亀に競走させ様と
虫と異ってゐる事は其の男には充分理解されて居るのだけれどもー。

山行は打算でもなければ社界的人間慾の対象でもない。山は人に迫る。

2

立山・乗鞍・八海其の他多くの山の絶頂に神の祠が祀ってある。それを拝む時に最も大きい恐怖と感激とを経験する。そして感謝の念は湧かざるを得ない。人はその全存在が脅される。然し山の空気は一言でも温かさを送っては呉れぬ。避難所を救ひ求めるともうそれは宗教の境涯では無からうか。此の場合山それ自身は捨てゝ顧みるんがやなからうか。山行の真剣味はそこに胚胎してゐるのだ。

3

山岳味を知らぬ者は五万分の一を拡げて見るがいゝ。その大部分は曲線で埋めたてられてゐるのだった。

山行は打算でもなければ社界的人間慾の対象でもない。山は人に迫る。

2

立山・乗鞍・八海其の他多くの山の絶頂に神の祠が祀ってある。それを拝む時に最も大きい恐怖と感激とを経験する。そして感謝の念は湧かざるを得ない。人はその全存在が脅される。然し山の空気は一言でも温かさを送っては呉れぬ。避難所を救ひ求めるともうそれは宗教の境涯では無からうか。此の場合山それ自身は捨てゝ顧みるんがやなからうか。山行の真剣味はそこに胚胎してゐるのだ。

3

山岳味を知らぬ者は五万分の一を拡げて見るがいゝ。その大部分は曲線で埋めたてられてゐるのだった。

る事を見出すだらう。そして平野といふものはその曲線の裾に僅少の部分
ない。人間が平地に生れて平地に還へる事を反覆してそして其処に人类五
る。併しそれは何と地数の小部分に過ったら千年の厂史は展開す
を云ってゐるのではない――世上の俗事に心痛めるものは山頂に立って人
見るがいい。

私はかって次の様な事を印象深く読んだ事がある。
……自然は如何に荒涼寂寞を極めてゐても二人三人と隊を組んで比の荒涼
るに社会を挙げて自然に迫るのである。社会の機構（カラクリ）の下に自然を征服
唯自己一身を投出して、端的に自然に面する者に非れば真正に孤独を経験し
を経験する事が出来ない。単身を以てフレムトなる力の中を探る者は要す
中に自己を没却して而もその中に無限の親愛（コンタクト）を閃拓し行く時、初めて真正に自己の中に動く力
る力の積もしさを感ずるを得やう。……

社会の力で山に接触するものは山から脅威を受ける。山から逃れる純粋経験は但別対但別の問題で唯相手の一つの但別がだから隊を組んで山に行くのは前の様な経験を予想し得てゐるだけだ。

ーンの観念は妥当しない。何となれば山はいに相違なからうと思ふ。ー併しそは個人徳と云はれるものの純粋経験のイデーをぶちこわ約だった。だから山に登る人の考へ方が情ふ。登る者が皆端的な山に対する敬虔さを要は起らない筈だぬ。又此の意味でも山は超人間的な偉力を会生活的のノルムに持ってゐるのだ。山の融和三昧に這入った個人の心境は何等必要の余計事だってゐるではないか。山の偉大さは人にこ別対個別の経験で行かねばならない。日蓮自身の中に動く預言者的の自己を信じてゐられたのも人間的誘惑」を斥けたのは山から社会を切り離したい為だったと思ふ。せ捨人といふ。私はそこまでは望まない。張り」と「深み」と「力」とを……

断想

中島　憲

私はさきに単独登山を礼讃したけれ共、心境として保持される山岳観はそれ自身価値がある。併し私共は複数を以て山に行く、隊を組んで山に行く事は一味は単独登山でなければ味へないといふ事とは同一の評価で論ぜられてはならない問題だと思ふ。

S君

自分は此処に於て、初めて円満な蒼空を見る。夏の濃い空の色を、恍惚として眺める。自然を味ふ力が、次第に好い日に、山頂に立つて、一度この美しい空を見る時に、一度この美しい空を異を以て見ると同じかゝたならば、恐らく自分は、恨んだに違ひない。あの美しい蒼空の底まで飛込んで何から何まで見れるものか。

そして青木湖があくまで青く澄み、あたりの山々を以て、空を限つてゐるのを見る時、こゝ等の美しい夢の中に於て自分は一

度自分に還らざるを得ない。しかしながら。この絶対の美に比べて卑き自分なるが故に、自分への愛である。自分はこの時、自分の前途に強味を覚ゆるのである。いつまでも抱んでねたいものだ。

×

S君

僕は今山々に抱れて、夕暮の山嶺に在る。そしてもう徒に自分を卑しみもしないまた帯の連峯が、頭を乱雲に包まれながら聳えてみる。僕はその偉を想像する時、前には白雪が深く喰込んでみる。自分に比べて卑き自分なるが故に、自愛する。自然への思慕は青白い雪が深く喰込んでみる。力強いその膚が僅に三千米突らずで終ってみやうとはどうしても思はれないのだ。

×

限の彼方まで蒼茫として遂に判然として自ら引締めずにはおられなかった。自分はそこに、冷い血の気のない固を思ひ、自分の前途に強味を覚ゆるのである。いつまでも抱んでねたいものだ。

×

S君

僕は今山々に抱れて、夕暮の山嶺に在る。そしてもう徒に自分を卑しみもしないまた帯の連峯が、頭を乱雲に包まれながら聳えてみる。僕はその偉を想像する時、前には白雪が深く喰込んでみる。力強いその膚が僅に三千米突らずで終ってみやうとはどうしても思はれないのだ。

山の膚を透通して

時もより遥に近い光だと思った。その時自分の心にはふと、故郷の事が浮んだ。

もうすっかり暗くなってしまった。充満した心地を抱いて、宿へ帰らう道辺にほの白く、月見草が匂ってゐる。何の感傷も起らない。すっくと木立に風が通ってゐる梢だ。

×

S君。

今日は白雪から唐松まで縦走して四谷へ降らうと思って直に出た。空は一面に曇ってきて八方の小屋へ午前二時頃着いた。八方の雪渓を通して霧と風雪がごろごろ鳴ってゐた。霧の中を、夢中で降る。美しい花が所々に咲いてゐる。至純そのものである。その名の一つすらも知らない。自分には美しいだけでいい。心はそれで一杯である。名を知らうとは思はぬ。

×

八方の池にかかる頃、果して大粒な雨と一緒にやって来た。そして、篠突くばかりの大降りとなって来た。雨足を通じて雨がしみ込む。寒いとも暖いともつかぬ心地でなほも下る。

雨が少し静まる頃、道も次第に呑気になって来て、何時になったら下りきれるのか解らなくなる。野衆の梢に宏い尾根の全体が晴れてゆくと共に頭はれてくる。四谷の村落に陽が射して

ねる。何ひの山に射すのか、殊更に強く感られる。雨は全く止んだけれども、滴れた草木の露が袖にかゝって全身が湿れ鼠である。道が平担で中々はかどらぬ為に、つけた人の頭の悪さを攻撃し始める。そしてその頃にはもう陽も既に落ちて、落色が一面にあたりをこめて、山麓に降り立った頃は心軽く宿へ急いだ。私はいてみる。

×

S君

昨夜は一の俣に宿った。自分はあの一夜を忘るゝ事が出来ない。

×

疲れた足を引ずって槍沢、二の俣、一の俣がほゞすると川辺の熊笹の深い所に一の俣の小屋は、夕煙を立てゝみた。晩く心を引かれたので宿ってしまった。未だ新しい木の香の高い小屋である。

立った男と二人きりである。

炉の火は盛に燃えてみる。僕達二人は傍の丸太に腰をおろして、眺むともなく焔を見入って

みる。そして私は山の旅も明日を以て絶る事を思ってみる。

いゝ気持にぬくまって、夢心地になる。今投げ入れられたばかりの枝がシユツ〳〵と音を

立て、燃え尽きてゆく。そしてその度に焔は一層大きくなって、反対側の壁に写る、客人の姿がはっきりと浮び、上るのである。彼も首をうなだれて、無心げに焔を見てゐるのかも知れない。彼の写絵は、焔のゆらぐと共に揺ぐ。それが如何にも力無いものとは思はれない。そして愕然として自分に振返った。自分自身も亦つまでも見守ってゐたのである。

夜は止めなく更けてゆく。小屋では色々と饗してくれた。そして夕食もすんで、もう寝るばかりになった時、自分はひとり屋外に出た。流の音のみ響いて、あたりは物凄い声を耳にする。

自分は耳をそば立てゝ、夜の声を聞かうとした。時々何とも知れず大きな月が出たのであらう、からだが次第に引締る様で、何とも云はぬ気配があたりを閉込めてきた。時々何とも知れず大きな声が何処かでする。

偉人は今安に眠ってゐるのであらうか。この黒い闇をがっと見つめる時、巨大なる山と云ふ巨人の息を見た。

寒さが激しいので、自分は決して眠らさうとしてゐる。客人は炉の傍に安に眠ってゐるのであった。

彼は猶営々として創造やがて小屋に入った。

X

S君

X

自分は今山を南れから鳥川を下って今蒜にゐる。来念

最後の妄我をほしいまゝにして、今は大文に低い所にゐる。しかし考へると、この低い所が本来の自分の所であつたのだ。そしてつくづく山の高い事を想ふ。

自分は眉きを誇りを高に歌つた。歌は各々に響いて大きな反響を呼起した。止めかねる湧を払つて、彼帝念の方を見返つた時、雲間に隠現する帝念をみて、自分の胸には安心の思ひが充つていつた。しばらく立つて自分はあたりの闇いのに驚いて立上つた。居よ、自分は嬉んで燈の町に帰るであらう。

（一一、一〇）

村尾金二

歌

物がある。そしてこの度、歌がある。

生物がある。矢張り歌がある。生物の大きくなるにつれて歌も大きくなる。

自分が居る。歌がある。日と月と年を迎へ送るにつれてその歌も、愈々大きくもなり、深くもなつて行く。

その歌は「憶ひ出」である。

物について離れない歌は、矢張り自分の生きる限り離れられぬ歌である。

今校にはいって三年、最もさゝやかながら成長を続ける。その生活の中み出して見たら、どの歌にも(どの歌にも)鮮やかな「山の憧れ」の裏打がしてあった。

ゆりかご

飯田町の駅こそ、なつかしい訳である。秋父の線や、大菩薩の紅を憶っては、東山の雪に憬れては、幾度か、駒や、白峰の姿に惹かれては、遠く信濃路の魅せられては又、遠く信濃路の空しまたことだらう。

恐しい地震の前から粗末だった此処の駅を此処から踏み出した練兵も、そのまゝ積まれて今は猶更の事。柱は露はだしだし、崩れた煉瓦は物淋しい。然も此の貧朴な駅は、山に旅する自分達にとっては何とふさわしい所だらう。

あの丸の内に睥睨する鉄兜の口に呑まれて、乗いクッションに身を持たせるギゴチ無さを思ふ時、此処の冷い板の腰掛に坐って尺を投げ出してるのに言ひ知れぬ親しみを感ずる。たつは大低、十時か十一時半頃の夜行である。

薄暗い電燈の下にハチ切れ相なりユツクを置いて待ってると、友の誰彼がやって来る。軽い冗談の二つ三つも飛ばしてゐる中に抑へ切れぬ嬉しさが瞼の底からコミ上げて来る。無暗

に燥ぎたくなる。

「長野行」若い駅員が呼ぶと一しきり静かになって改札口に並ぶ。

パチツと改札鋏の切つて下す鋭のスタート。一時にざわめき出す。静まり掛りの下駄の騒音。うつろに響く人々。

祢だつた階段口への人の雪崩。ガタ〳〵引摺る下駄の騒音。うつろに響く人々。

た石の階段を跳ぶ人々。

脊のサツクをゆり上げゆり上げ、コンクリートの歩廊に危く滑りそうな靴

く〳〵乳ませて駈出す。

「皆乗つたらうと」と一応見かへる。膨らんだサツクは網棚に納まりそうもない。

やつて来い」と軽く返事して、又、夢あゝと軽く返事して、又、夢から覚送る友の力強い声。

ひ浮べる。

長いベルがやつと鳴り終つて、発笛が細く尾を曳く。ゴトリ〳〵と動き出す。赤と青のシグナルだけの寒きてゐる闇の中をひたすらに走轟々の音立てゝ三日の旅、八日の旅が醒め勝ちな夢の様籠の中に始まるのだかうして快い

紫

秩父の滝からの嫁な登りが半日も続いた。消えては無くなる旧道の跡を辿つて行く中、それ

もパッタり見えなくなって教くぶりの苦行。やっと大日平の端に立ってホッとしたのは永い夏の日も暮るゝに近い頃だった。滝を出たのはまだ午刻にもまわってなかったのに。

短い草の上に寐ころんでサックによりながら見渡す大日平。草原の北を抱く林に限ってる大日岳の裾の木々の深い緑。富山の空になびく、その日の名残りを告ぐる日輪の彩る紅の雲。称妙の谷の何ふを延びて行く弥陀ヶ原の上に肩を張る薬師岳、紫の影も濃い紫だ！

「おゝ、あの紫だ！」

始めて窓に登って水俣から天上沢に罩める霧を見てからの山恋ひはこの紫を見る度毎に濃くなって来たのだ。

ユラ〳〵とゆれて、友の肩越しに空遠く未練なく消え去る煙草の煙も、あの紫の色だった。

白日の下

日が照り出した。敗々強く輝き出した。冬の三日間、目も明けさせぬ吹雪に、赤岳の小舎に籠められて、降りるにも降りられなかった。

四日目には林ひとつ去った林に晴れ上った。

！好かった。しー

「今日こそ降りられるんだ」

来る日も来る日もの悪天候に打ちのめされる時が来たのだ。乏しい焚水を集めて最後の朝食を終へたのは十一時に近い北方、硫黄岳から真一文字に走る尾根を南にガッチリ受け止めた赤岳のみるのだ。

硬岳の巌の露はな力強い線の彼方に、硫黄岳の高台が展く。二つ三つ飛んで、薬科山が丸い。西駒がのたうつかでポッカリ浮ぶ。雲は無いが風は強い。乱上げた赤岳の頂から右へ一線を辿る。一段落ちて中岳の角錐。層一面ピッタリ鎖つた雪は日に映える。飲まれば斬らん白刃の気に満つ。

「此処だ！」後に怪傑な阿弥陀が聳える。真黒な岩はだに喰ひ入る雪の太いラインである。

東に遠く富士、金峰、国師〝向にひろがる野辺山原、念場ケ原の動かぬ陰影。矢張り丸の山である。

西に柵川の谷が開く。

「この谷だ。この谷こそ、三日の間降りようと待ってたのだ」

「この谷だ。そして今日こそ降りられるんだ」

谷が遠ひ上って横岳に迫るあたり、真赤な岩の削壁となる。切立てら此まりかねてか、赤く剝げたまゝ、腐れた目にも痛々しくうつる。

赤岳側へ遠ひ上った巻には積った雪が風に研ぎすまされて、大理石の彫刻が並ぶ。

二人は無言。氷が屎を包む。〃

色に輝いてチロ鳥も啼かぬ。クルステの表面がキラリ〳〵光る。優松の葉から雪餅の塵が五身仕度がすむとすべり落ちる。

「さあ行こう」。

岩を噛む。歯の先から白い粉雪がパッ〳〵と飛んだ。

又、景

追ひかけられる様な気持で尻を運ぶ〃ガチやり、ガチやり、アイゼンの歯が

赤牛から黒岳への尾根伝ひ。珊珠ノ平、高天原に祕められた池々が鏡の様に光る。堪らない魅惑だ。

東沢から、昨日一日、三ノ沢上りに費して、今日の昼になって、やっと云ふ気が、唯さえ不気な三人の気持を益〻伸び伸びさせる。黒岳の登りになる。遥りつめて赤牛へ着く。是で赤牛岳も終ったと尾根が終って、ガラ〳〵の頂上。腰を下す。空大きな赤牛の

が桔梗色に澄む。
「針の木だねし
「レンゲの後は何だらう？」
「何処かしら？　妙高かな!?」
「火打かも知れないねし
一しきり遠望の会話が走る。
暫く静まって、又四囲の眺めに酔ふ。
「あれが黒岳の歌だねし　沈黙を破る。
傾きかけた太陽に、黒岳の尾根からは大きな烏帽子の腰へと延び
る。
「こちらで動くと何ふの歌が歌くよ」。　頬杖つ
「そうかいし」。一人が狭い石の上に立上ってピ
大きく刷かれたあの歌の粗布(あら)に、何で赤子粒
「軟目だいし　振る手を止めて夕陽に赫い顔が
「当り前さし　頬杖は澄ましてる。
「行こうか。」

「うん」。云ひ出したのも、返事したのも勝手に上げようともしない。

「此の下に水晶があったね」。

「誰だッけ・去年、水晶を採るんだからもう一日此処でキャンプするって採すって云ったがやないか」。

「そしてザイルを持って来て此処の下を降りて」

六つの瞳が互に見交はして微笑む。

見下した東沢の谷のうす暗い中に紙様の白い脊がボンヤり浮んでた。

森竹春雄

小品二題

集鞍の感じ

若し山に男性女性の所謂ゼンダーの区別があるとしたならば、さしずめ鞍部は女性的山として、代表的なものであらう。集鞍は実際周囲の峻厳な穂高の峯々や霞六百の人を近づけまじい気骨、さては焼岳の凄じい噴煙等其等の男性の豪慢に対して飽く迄も女権の拡張をはかうとしてゐるかのやうに、その偉大なる衰裙を拡げてゐる。然も決して人間の女権拡張亭主尻しき論者のやうに、金縁の目鏡に、洋服の気作はなく、朝日、夕日に輝

く、額の雪の美しさや・眼に滲へた真珠の水の冷たさ清さ。美や白の花の、しい興趣がある。山の懐しい、秋我が、なんとなく我等の心の中に染み入が漂く。あの大宮の御所にでもありそうな自然の庭、ばひ松のしたゝる緑、のせゝらぎ、之等の自然の調合の美しさは、我等の心に進化の神の腕のさる。高天の泉と云はれる山上の平地も、その名にかゝはつて進化の神が彼かのやうに備感せらるゝ。

白骨温泉に来て

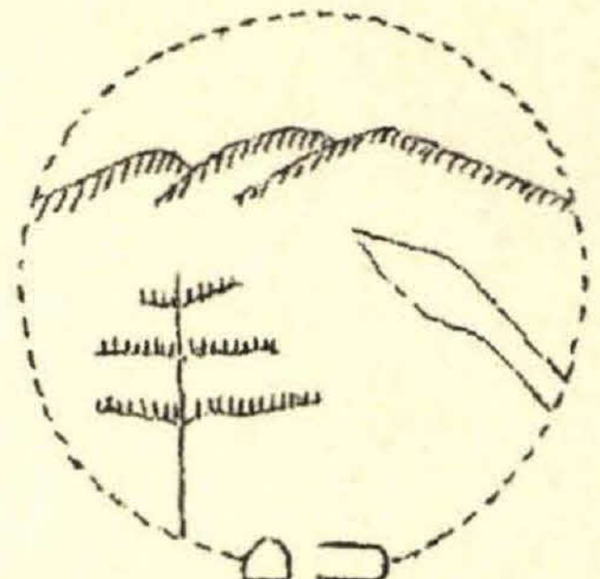
峠を越へて下り初める頃、遙かに谷間の方から鵐の声が人なつゝこく聞え山の湯宿の姿が木の間隠れに見えて来る。更に下る中気が旅人の心を無暗と嬉しくする。峠道を下り切る頃温泉のにほひが安着してその一隅から、もくゝと噴き上つてゐる湯はせる。土地の人々の純朴さ、宿料の安直さが又山の旅の人達を気安くさせて知らずゝ湯治気分にして了ふ。

一之も手であるわいしと誰かを喚ぢさす。秋つてゐる。温泉場の下手の方に一つゝいとほし灌漑、鬼ケ城の盆等の奇観があって旅情を慰めて哭叫る。霧の中に月光が温泉場を照らしてゐる此の浴衣掛の若い男や女が本曾のナカノリサ

ンを歌ひながら宿から宿へ踊り歩いてゐる美しい情景だ。土地の名物の蕎麦（そば）の味も山から山へと行く旅人の口に、時ならぬお正月をさせる。

そのそばやには何時造られたとも分らぬ寂しい近にもの古びた三味線が一丁掛かつてゐた。それから又宿に泳太郎と云ふ馬原の早熟せた子供が居た。謎の部屋へも遊びに来て皆の手物になつてゐた。等が皆な思出の種となつてゐた。懐しの山の湯よ。

（十四・十一）



紀行

山讃賦

松崎武雄

紫の雲、ゆらめけば
白銀を射る金箭や
おごそかに山鳴りわたり
霊香の四方に薫じて
山々はいま、明けんとす
后見ずや、東の空

大聖の世を呼ぶごとく
山神は炬火をかかげて

ものみなの生命のうへに
悠久の光と熱を
おしゆなり。いざ　市去りて
崇厳の山におろがめ。

岩桔梗、黒白合咲ける
花園をつゝむ山霧
はいまつの蔭より蔭を
おぼらかに遊ぶ雷鳥
若人は六根清浄、
唱へつゝ双手ふるなり。

あゝ、山は音が行く殿堂。
あゝ、山はわが棲む宮処
煩悩も邪悪も忘れ
法悦と歓喜にみちて

山嶺を遠くきくとき
うつゝなく、ゐまひするかな。

秩父國境山脈縦走について

(一) 金峯より雁峠まで

寺沢一郎

僕は前置きが頗る下手だから直に本文に入る。まず金峯から国師までゝ人が行つても濃霧にさへ遇はなければ心配がない。近く金峯山で慶大生が死んだがへ其の頃僕は村尾、渡辺の両氏と三人で東沢を歩いてゐた。（あの人はほんの僅かの注意が足りなかつたのであんな事になつてしまつたのだ。）あの人はほんの僅かの注意が足りなかつた。金峯から国師岳三角点の西で荒川と笛吹川の上流西沢とが発源する窪地は三叉平といふ。その南の二、六、〇米の地点はクロがネ山と読む。国師岳三角点は秩父山脈の最高点で一般に此処を奥千丈岳と云つてゐる。金峯の頂や地蔵鳳凰などの頂と同じた花崗岩が露出してゐて這松もあり高山気分のする所である。秩父では頂に這松のある所は少ない。国師から真東に切明を行くと大きな岩のある所へ出る。地図通り右へ行けば天狗岩で四五人の野宿は出来る岩穴がある。国境山脈の切明へは北から真北へ下つてゐるのだから注意して探せば

い。暫らく降ると右へ良く潜んだ所があるがそれは石塔尾根へ行くものだ
い。若し行ってしまって荒岡岩の急斜面へ出たら少し戻って切明へ出るべく西へまけばよい。
降りきるまで切明は明瞭であるが鞍部の所は多少倒れ木がある。僕が通った時には此処に側師
の小屋が四軒もあったが今はないだらう。附近一帯に木屑が落ちてゐる筈だ。水は国境から信
州側へ約廿間も降りた所にある。三角点二、三七一米の峯は東股ノ頭と云はれ此の峯からは秩父
の神秘を蔵するといふ子酉川の上流が一眼に見渡せる。北のピークの東北及び西南の峯には宮
内省の石標がある。東股ノ頭は甲武信方面から来てもうっかりすると通り過ぎ
てしまふから注意する必要がある。何でも一米の峯の肩の称な所を通るなと思つたら東にある三角
点への切明を探さなければならない。次に二、二四。とある石標の峯を越すと切明は東北に何ひ
てゐる。そして四つばかりの峯の北側をまく様になってゐる。鞍部には地図に信州側から道が
来てゐる。此処から登った所に木石標がある。二、三七九米の峯にも石標がある。富士見の支峯
といふのは此処である・これから甲武信までが一寸問題なのだ。まづ石標についたと思つたら
ぐっと東へ地図通り曲らなければならない。少し位若しくても倒木の間を
称にする。降りきった鞍部には倒れ木がある。此処へ出たら一寸左へ行くべく尾根を行く
むした所へ出たら附近を探すと真直なすばらしい切明を発見するだらう。
となくなってしまひ今度は敎潜りだ。これは右へ行った方がいい。此処は加減で倒木を越へ苔

である。鞍部へ降りたら次の峯は少し北側をまく様にする。そしていゝと、すっと右へ出ていゝ。すると甲武信の西南面のがしに出る。此処からりでも一度巻くぶりをしてがしに出ればこの上は甲州、武州、信州の三国る。国師・甲武信間の縦走は秩父で尾根縦走の最もつらい所であるがまとべく尾根を離れぬ事、国境の切明及び標木をたよる事である。木賊山三角点へ二、四六〇。とある岩の字の所にはナギがある。地図に甲武信嶽の字の所にはナギがあいゝ。木賊の下りは始めの石標はいゝが次の石標あたりで少し切明が不明注意。一、九五二米の独立標高点ある戸渡尾根へ下らない様にする。破風のまった鞍部の笹原にある。地図はもう三峯図幅である。水のある所まで下り十分上り十八分である。小屋から大菩薩嶺は実に。水は北に四丁下る。

気ある峯は西破風でその東南の峯は東破風である。前者は西方の外開け、が通った時は天気の為か西破風の登りには苔しました。東破風の下りは急である。三つばかりのピークを越したに最もよった。鞍部には野営の跡がある。こゝから少しの間切明が不明だば旨くぶつかる。雁坂嶺へ二、八九米。雁坂嶺の眺望も良かった。此処から峠までは南面の笹の通り尾根を行った方が楽だ。峠の少し下には地図に黒岩とある尾根即ち水晶尾根を行く林道の

入口がある。峠からぐっと南に登った最初
切明不明な所が一ケ所あるがすぐ解決出来る範囲のせまいものだった。古礼山で
切明を下ると次の三角矢ある峯は持越山で
うも林子が変なのでいゝ加減な所から藪くぐりをして国境を出たらそこは笹原で三角矢は既に
過ぎてゐた。二、三十間戻ればいゝのだが面倒だからやめてしまった。あまり笹原が広くて道が
よくわからないが少し磁石を出して東すると国境の標木が笹の中に立ってゐるからそれ以后は
切明をたどればいゝ。雁峠まで二、三の峯があるがそれはブド沢の上を通り結局
山から雁峠までは急な降りだ。降りきると左へ行く道があるがそれへ行くものらしい。真直行くと右へ曲る様になって
水晶尾根の道と合して栃本に行くものらしい。雁峠まで二、三の峯があるがそれはブド沢の上を通り結局
く広い尾根を行けば多摩川本谷の小屋に出る。笠取山へは左へ行き笹の急斜面を登らなければ
なるまい。以上で僕の分は終ったが時間をもう一寸参考までに書き添へて置く。但しこれは相当な
荷物があっての時間だからその積りで、秩父へはまづ五円あれば東京の風に一遍吹かれず山
の中をうろつけるから多いにプロ黨へすゝめる。自分も此の意味に於いて秩父は大好きだ。

金峯――国師――鞍部――雁峠（二時間半）

三角矢と西南の峯との鞍部にも石標があった。三角矢――富士見ノ支峯――破風小屋へ一時間）

支峯――甲武信へ二時間）――破風小屋へ三十分）――東破風へ二時間）

廿分）――雁坂嶺へ（四十分）――峠へ三十五分）――雁峠より六ツ石まで

（二）　渡辺

雁坂峠以西の所謂奥秩父は峰は何れも二千五〇〇米を上下し、落ち込む谷々は真に秩父の深林の美、渓谷の幽邃を神秘の懐に潜めるに反して、雁坂峠、乃至は雁峠以東の又その幽玄の気に於て、些劣るとは云へ、大洞の深林、雲取の雄大、憩まして気澄み空高き今日近頃東京の吾等の眼に彼等底吾等の忘れることの出来ぬものである。

厂峠以東の連嶺がその威容に於ては、その小屋沢の深刻等更又到なつかしさは厂坂以西の高峯も到底之に及ぶべくもない。自分はこのなつかしさ厂峠以東の山々へ行く人のためその参考にと茲に書き付ける。

笠取山へ一、九四一）厂坂峠から右礼、将棚腰、燕山と来て一度降つて雁何き直つて笠取山となる。北側を除く外は山となる。北側を除く外は草で道は峠から真直ぐに登る唐松の苗木が植えてある。笠取の腋を巻いて直接将監峠へ行く広い道と村へ降る道の傍に立派な小舎のあることも忘れてはならぬ。峠から頂上ってゐる。

秩沢山へ二、〇（一時間半）水が深い、石楠も多い。笠取から行くと小突起が五つ許りある。切開明

瞭、笠取山から三十分。

唐松尾へ二、一〇。九）枝沢山との鞍部は深い。眺望は相当いい。

三つ、頂上は南北に一寸開けて三等三角矣、

へは北へ行かず東へ尾根を辿ることに注意。

午王院山へ二、〇六〇）岩峰が二つ並んである。眺望は相当いい、唐松尾

分。将監峠へは尾根と離れて南に深い笹の急斜面を降る。峠の道近二十分

に小舎のあることに注意。

竜ビミ山へ二、〇一二）峠から頂上迄は草。

うねって、夾は此辺で最も深い。餓く近尾根の上に切開を探すことが肝要

によると大洞の頂上の直ぐ北で道は尾根と離れて巻いて登る様になってゐる

思ふ。北側の懐谷の深刻はこの縦走中の最も見るべきものと思ふ。

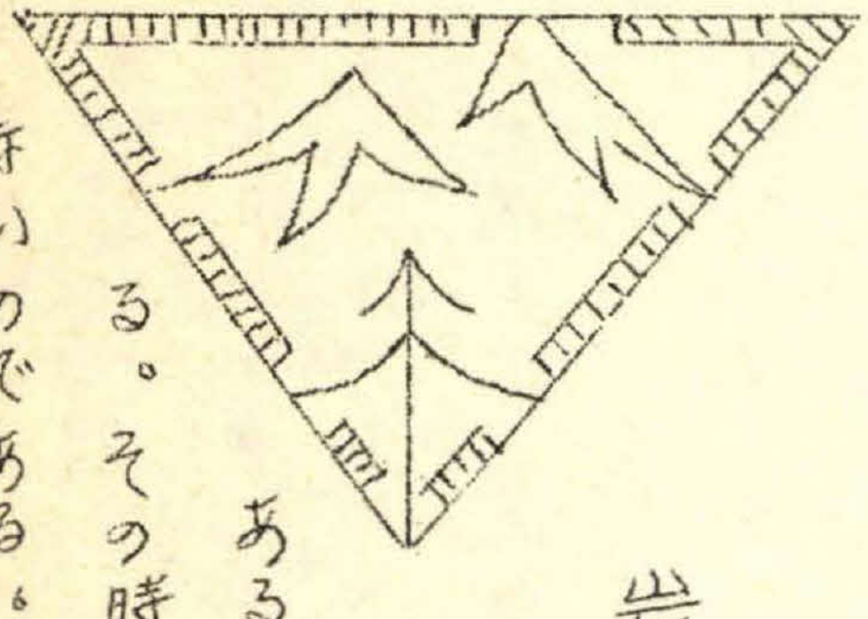
大洞山へ二、〇六九）頂上は一寸南に開けて眺望は制限されてゐるが、大

無比の展望台である。竜ビミから三時間はどうしてもかゝる、而も注意を要する。

柵沢山へ一、九四九）大洞からは三つ岩の岩峰を併せて丁度十個の小突起がある。夾は竜ビミ

大洞間程深くない。切開も明瞭、大洞より二時間。雲取の雄大が感じられる。

雲取山へ二、〇一八）柵沢山から深い笹の尾根を二百米降って、三条ダルに達し、又笹と草の



岩菅山スキー初登攀

吉沢一郎

あ る。そのない のである。僕が此の山を知ったのは雑誌「山岳」からである。

此処にいふ岩菅とは信州下高井郡平穏村に属する標高約二、三〇〇米の山である。スキーマンが野沢、関山、赤倉と志す時には必ず信越線豊野駅を通過され時高井富士の右遠かの方に光峯を発見されたならばそれこそ岩菅山に外ならない。僕が此の山を知ったのは雑誌「山岳」からである。殊に「奥五州」の藤島

間を二百米と少し昇って頂上に達する。小径明瞭、柵沢山より二時間。北側を除いて大ツ石迫はカヤ屋根が一条に続く。

大ツ石山へ一、七五〇米雲取より一時間。頂上は笹に立木が繁って、祠の裏にはこの山の所以を示す大きな岩が列んで立ってゐる。敖を敖へたらおそらくとつ なんだらう。戒が平凡なので雲取から見ると、鷹ノ巣の方が目に付く。

鷹ノ巣山へ一、七九〇米低い草山。鷹ノ巣と同称頂上の北を巻く。氷川の村へは二時間三十分。道は鷹ノ巣より三十分。

六つ石山へ一、七〇〇米一寸形のいゝ草山で、七ツ石から一時間、しかしもうこの辺へ来ると秩父も随分浅くなる。

川の村へは二時間の降りだ。山が平地に降りたから筆も茲で休む。

岩菅附近略図

I·YOSHIZAWA

陸地測量部地図

五万分ノ一

〔中野〕

〔岩菅山〕

往ノコース

復ノコース

大倉沢
中沢
音沢
カリボリ沢
柳子沢
右文衛門沢
カニナベ
福井沢
2.060
ノツキリ
岩菅山
(2.295)
2.329
武岩菅山
焼額山
(1960.3)
西鎌山
(1956.8)
翼ノ平
栗ノ木
地獄谷
寺小屋ノ峯
(2.125)
カッパ沢
横川
石沼池
赤石山
(2.109)
(2.035)
メーデ志突
向岩突
鉢山
早津峠
地獄谷
上林
峡
長峯
十二沢
小江平
沢坂
猫池
湯打峠屋
朝日山
一ノ池
横引
ハス池
久池
白ケ洲(古名ウサクケ)
泉池北
木戸
平原沢
岩倉沢
塚沢
針ノ木沢
(1.837.5)
坊平山
北オン出シ
笠ケ岳
(2.095.8)
南オン出シ
小笠
大平沢
焼又沢
仙ケ木尾根
(1.751)
箱石
芳笠峯
三沢山


AWAZIHSOY·1
(1012)
(2285)
(2525)
(2952)
(2722)
(2452)
(2452)
(2452

氏の記行文を見て以来この山へスキーで登つたらと思ふ様になつた。去年の十二月閑温泉の帰りに波まで行き様子を聞いた所、登る事は出来るが明日は年越の日といふので案内者を得る事が出来ず、自分も未経済的に長居は出来ない都合にあつたので三月に登る事にして帰つた。爾来この山へスキー試験の終るや否や成ればかりは堂々と野沢に乗り込んだ。

考へてみた岩菅へ登る為に上林温泉に向つた。

相変はらず桑年タクシーさへ出来ない。しかし兎も角一週間の練習を終えて三ケ月の前夢現に安いから宿るならこの家をすゝめる。

飯縄の花には白馬鑓から鹿島槍まで包銀の姿を見せる。廿一日は平穏温泉スキー校会の発開式の為休養。廿二日は晴天発補まで行く。藤倉氏の言の如く眺望は良い。立山、鈬、針木哥北の大立物が順々と頭を出して来る。

滝坂の上から入キーをつけた。雪質良好。

滝坂の上から入キーをつけた。雪質良好。

今は全然夏道を通る必要がない。一面の雪原、雪丘の上を自由に歩ける。

滝坂、番打茶屋、朝日山、琵琶池の北を通り横引を経て横湯川に降り着いたのは二時頃、飯を食つて発補沢を遡り温泉に着いたのは三時。廿三日は吹雪、廿四日八時半いよく岩菅に向ふ

温泉より高天ケ原に出で、東館二峯の鞍部より蟹平に下り寺小屋の峯の北を巻き、カンナ沢を少し下り、福井沢の上部に出て梯子沢、福井沢間の尾根を登り、ノツきりに着いたのは十二

時半、岩菅の山頂は眼の前に急斜面を見せる。昼食後遂にリュックを置いて頂上に向ふ。西方の眺めはあまり無かったが東方はかなり良かった。依武流、白砂は手に取る様に近い。帰りはカンナ、福井の合瀧兵まで下り、往路とは違ったルートの沢山ある実にいゝ簡単なスキーツアーであった。

出で南面より直接温泉に下る。山頂より此処まで二時間半。試に好スロープの沢山ある実にいゝ簡単なスキーツアーであった。

一週間位の練習を積まない初心者でも一日中には確に帰れる。まあ一度は行っていゝ山だらうと思ふ。僕等一行五人即ち村尾金二氏、小栗吉雄氏、沢柳義三郎氏、小栗吉雄氏、三富福之助氏が最初のスキー登攀者である。

此の行は必ず来年度に於てはその方面の人夫も必ずスキーが旨くなってゐるから安心である。諸賢向は左記の所へ、

長野県下高井郡平穏村沓野　上林関金次郎
　　〃　　〃　　〃　　岡宇太郎

十月二十三日朝七時半沼田駅着昨夜の寒気に三国峠から清水峠にかけての万太郎・谷川富

武尊より茂倉へ

松木謙三

土・残倉は勿論武尊も之合目以上は真白に飾られてみた筈である。沼田迄貝向の気合自動車は甚だ時間不定であるし一時間半を要する。迫貝迄の箱庭的ではあるが絶景である特に紅葉の時節に於ては。

迫貝より約一里余会津街道を北進し千鳥新田で道を左に別れて片品川を渡り山崎に着く。宿と云へぬ様な木賃宿が二三戸ある。

左岸に移り漸く川を遡れば道は右岸に移り道に山に入って山に来た気分になった。

十月二十四日・六時四十五分出発。晴天お寺の右手から裏山を越えて登(ノボ)りよりいよ〳〵山に入る。道は広い尿の真中に後い傾斜でついてゐる。チヨイ〳〵小島も見られが段々沢に近く一時半後には沢を渉って不動坂の下の唐松の林に入った此処から上には水はない。登りつゐてゐるが大した事はない。登りつめると緩な笹の尾根にまいて小沢を渉って旅咲峠から来る尾根に出る。此処から十五分位急な坂が頂上まで続く。頂上に着いたのは十時半であった。頂上は二尺位の笹が密生して居って日本武尊の銅像だと云ふ二尺位の物がある・前武尊の眺望は予期に反しなかった。南八ツ北皆見える。槍と穂高だけは八ツキリ解った。東の方は何と云っても白根である。庚申温泉、黒岩の群山の中に真白く聳えて居るのは白根だけである。北は燧を始めとして景鶴、大白沢、平から越後の八海駒とも思はれるのが微に見とめられる。至仏は案外稀か

な山に見えた。併し最も注意を引いたのは谷川岳の岩そのものゝ様な姿であった。

頂上を北にバタ〳〵と下ると鹿ケ峯との鞍部に川場に行く道がある。

済ませて奥武尊に向ったのは十一時二十分であった。鹿ケ峯は案外上り多く又岩の間の尾根が狭いので時間を費し奥武尊の手前の突起まで行った時には十二時半を過ぎて居ったので残念ながら写真に納めたゞけで引き返し一時四十分川場へ下り初めた。道ふ中に直ぐ左へとからんで花咲峠へ行く尾根の一つ西の尾根に出てるのであるが割に岩が多く尾根も狭いのではない。左側も左側もチヨイ〳〵絶壁の面白い景色を見られる。一道に会ったのは五時であった。秋の日は短い段々暗くは時々火花が散る。星を戴いて歩く事。

る温泉ださうだが体温場で一時間位入っても寒くって出る事が出来ぬ。

十月二十五日・

大沼に向ったのは八時ゆる〳〵出かける十一時半・桑名の通りと谷越はいやな所である。

動車の砂煙に苦しめられながら谷川温泉に着いたのは四時一寸過ぎであった。

も火事の為にバラックになって居ったが湯槽は立派なのが残ってゐた。

である。

十月二十六日・終日濃霧に苦しめらる。霰時々来る。

出発六時二十五分・浅間神社の左手から裏の尾根に取りつく。道は今から歩き易いが道のつけ方が悪いので辛い事ノ〳〵。約一時間半も登りつめて千百二十米の辺から左に小沢に下り再び急な登りとなり二三十分で千四百四十八米九の名も知らい突起を越した所の千四百八十八米の右手の肩の辺に出て来る。此処を下り天神峠と云ふ。北側から見えたらうは工合が悪く前へ前へと進む。八時十五分天神峠を辞して二つばかり突起を越すとやがて笹は低くなり草地もチヨイ〳〵見られイヨ〳〵薬師の登りにかゝる。時は道を誤る事と云はれたザンゲ石に着いた。道は草地の何処を通つてゐるのか解らぬ。宿で霧で見えないので近づいて見たら此れがゴコウ石だつた。やつと安心して石を左に廻つて一寸笹をこぐと薬師の頂上に出る。時に十一時、盛に霰が降るので狭い岩の穴に入む、岩とはひ松を伝つて二三度上下して三角点に出で次の突起に残間神社の奥の院がある。地図に谷川岳となつてゐる山は遠くから見ると南北に耳があつて富士の形をしてゐる。谷川温泉で薬師と云ふのは南の耳であり谷川富士と云ふのは北の耳である。奥の院は一寸北の耳より低い突起である。

の間に湫川富士とあるのは何の理由もないのも惜しいが取つけるなら一ノ倉の真正に当るから一ノ倉山とでも言つたらよからう。

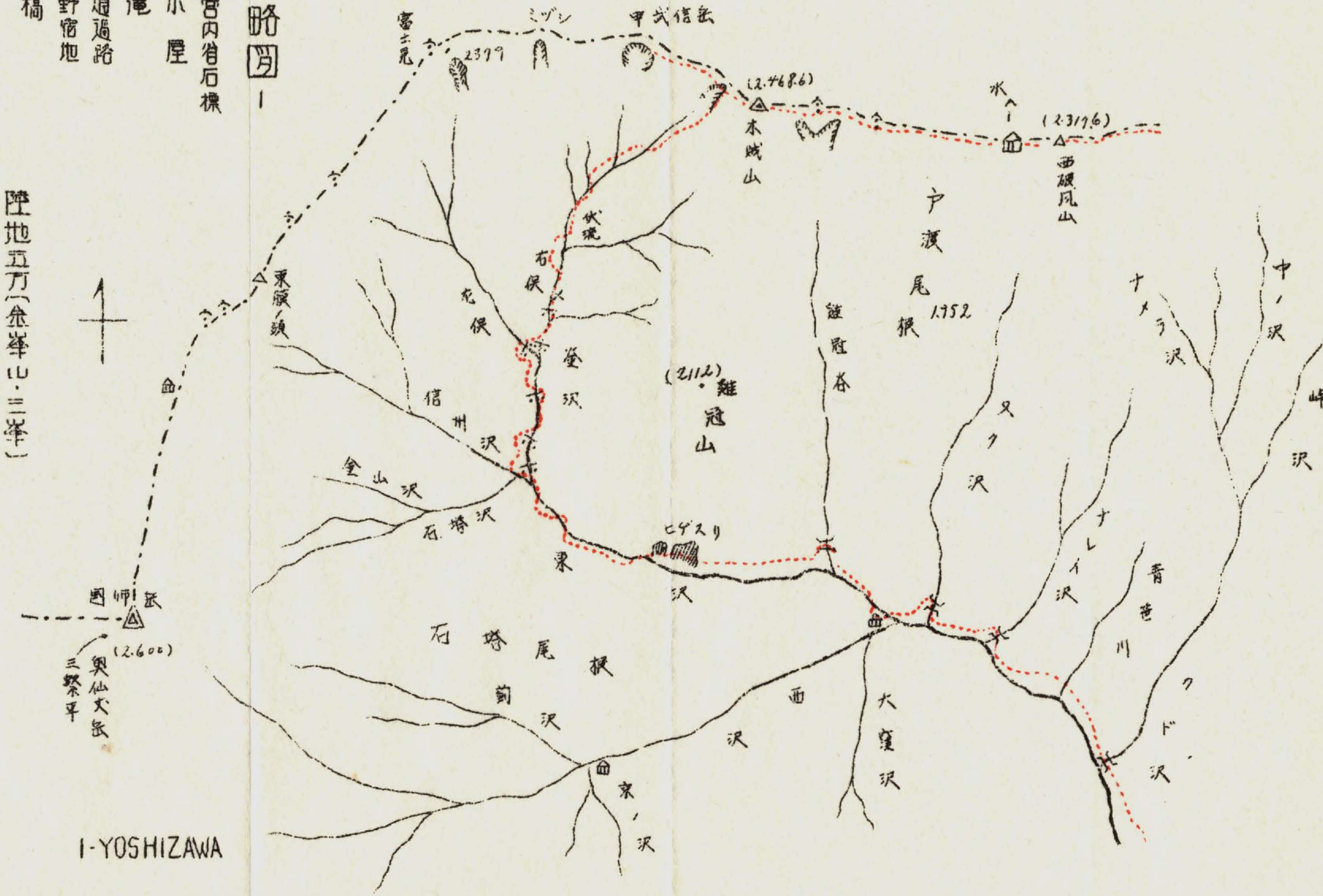
扨て十一時十五分奥の院を辞してはい松と笹と笋を続ける急に角尾根の絶壁で一歩でも辷れない。深い底には未だ残雪が所々に初雪が残つてゐる。滑つて危なかつた。約一時間半で一ノ倉山の頂上に出た時は木ツどした処からは気持の良い草地を滑る様にして下つた。残雪が二つある夏の露営には好適地である。万太郎の巻が非常によい。一時半に頂上に着いた。一時半に頂上に着いて清水越に向つた。道々紅葉を称しつゝも時間も空費した。二時半に清水越とても宿れる様な所でもないので思ひ切つて越後側に道をつけたのか奇蹟あつた。峠の小屋もスケツトを食ひながらの入口に向つた。ピストボク〳〵下り大時十五分前に土樽に着いた。は古い友達と珍らしい思ひ出話に花が咲いた。

大真名子、小真名子を経て戦場ケ原へ　渡辺九郎

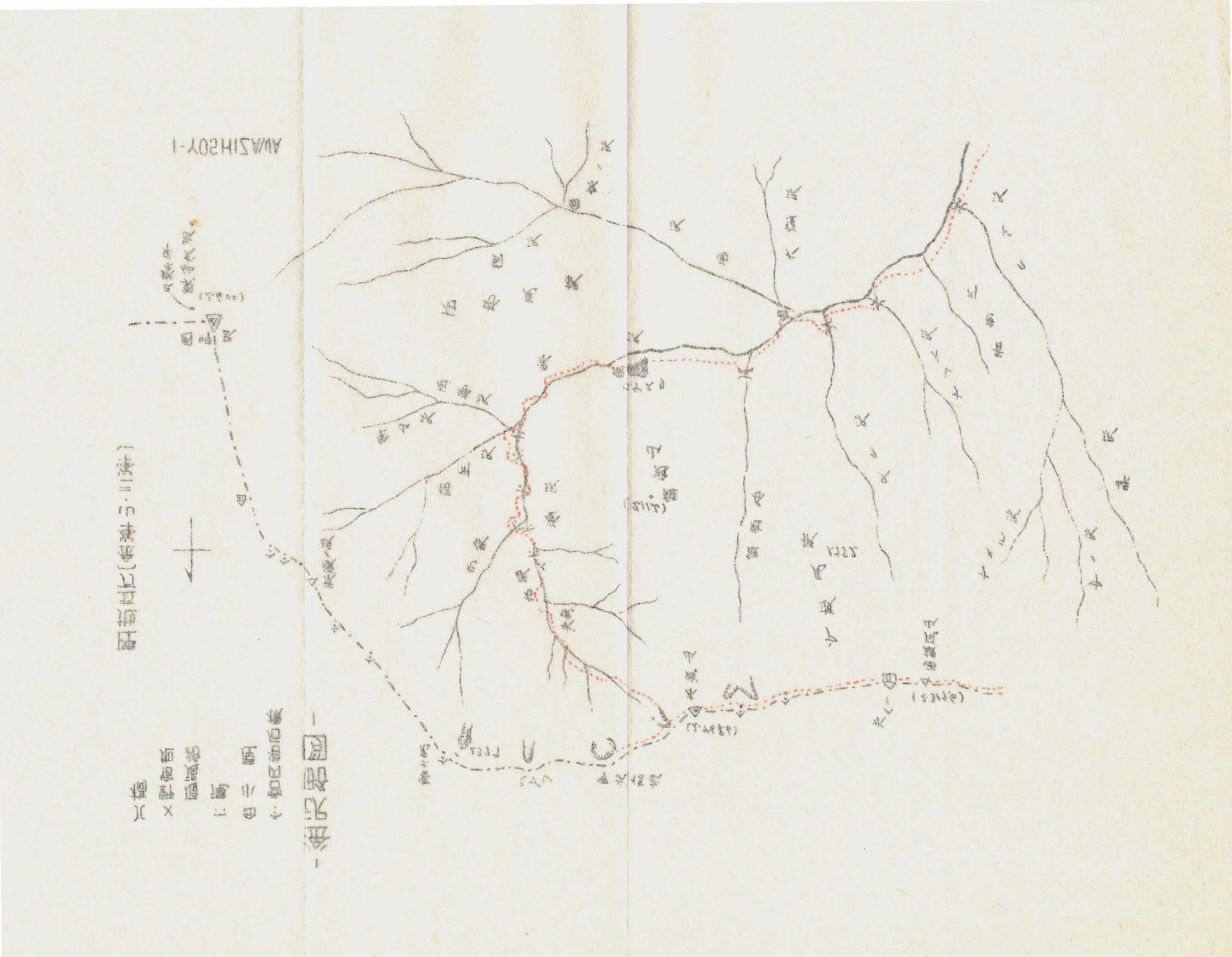
1-吉沢略図

宮内省石標
小屋
滝
通過路
野宿地
橋

陸地五万(金峰山・三峯)



1-YOSHIZAWA



晴れた夏の日に日光の町から遠からぬ鳴虫山に登った僕は輝く夏の
の塊を見た。それも四年前の事になった。
左端に
赤雑と続
ふつくり
小さくか
プスの討
行けな
い山、行きにくい山の猫行き度
画も立ち消えになって僕を捉へ
たのはこの大真名子だった。

八月九日（曇ー晴ー雨）

積本、正立と三人午前六時上野発、
拾時五十分光着、荒沢から裏　から裏見
てしばらく蒸し暑い林の中を登ると、前が晃
道をしたので鉄索について登ったが、今日は
い林が出て来て、午后一時八分深笹の河原を
と鉄索が左に見て畳の通ふ道を
なる。二時には小さい沢に出る。慈観の滝の下で荒沢に合す

ときには水が無かったが、今日は僅かながら流れてゐる。少し休んで沢ゐた空も水色を増してきた。二時四十分、待ってゐた密林に入る。黒木に混った白樺が目の渡って左岸を行くと、荒沢に合する。随分広いが水は下に深い箇が見えなる。もう山の懐だ。浅くなって道は沢を渡る。男体の雄大な入口をも目の前に見て少し行くと、四時八分だ。一段と炎は晃覚のある鳥居に出る。炎を通して大真名子が直ぐ上に見える。炎の香四時五十分、志津の小舎に着いた。りなく立ってゐる。憧れてゐたこのふっくらした山容は頭を圧する林に、い箇は夕日に輝く。西が晴れてゐる。大真名子にもいよく登るときが日が落ちる頃遠雷と共に小雨がやってきた。四軒の小屋の中この前のをつけて男体へ登った四年前のことがなつかしく後からく思ひ出された。

十日（晴ー曇ー雨）

寒さに目が覚めると二時、雨は止んでゐる。うとくしてゐる間に小五時出て見ると青空だ。急いで支度する。六時五十分小舎で、直ぐ右に廻ってしばらく笹の間を行くと四尺許りの神像があって道。一度箇を左に渡ってよく急な登りにかゝる。炎も深くなり、後に男体が

見え出す。

八時四十五分、尾根が狭くなって木も小さくなった。もう四百米は登ったらう。傾斜がいゝが、霧が深い。黄花石楠や、コゝセンタチバナ、イワカゞミ等が目に付く、岩が出てくると又急になって、鎖がかけてある。本にある千葉返した。御室からの金峯の登りに似てゐる。頂上が見え出した。どんく登る。先に行く根本の喜の声に上を仰くと三角矣とは同じ様だが、西北に一つ頭があって三角矣はその上らしい。祠の裏の岩の上に立つと、うすい霧を通して、日の下に戦場ケ原に唐松が細く短く、湯本への道もその間を巧に縫って泉を横切る。左右には太郎が吹き寄せる霧の中に雄大な大菩薩峠へのジグザグ一瞬小真名子のまる頭は近くに女峰の尖頭は一段と高く稍濃い霧の中体を思はせ、泉の果てる所正面には白根の一帯、

に覗はれた。

霧が取れさうもないので、九時五十分、出発、平らな尾根を北に取る。が急にその度を増して、鉈目を辿って二百米降って十時二十五分、小真名子にかゝると、登りは予想通り四つの降りにも増して急で道もない。

いどい傾斜の三百米を頑張り通すと、一寸平になり道も斜る。十一時頂上頂上は南北に長くて、三角点は北の一寸低い処にある。小径を扶んで生繁り、尺下には石楠が思ふ様はびこつてゐる、大真名子より眺望は落ちる求た。

大真名子伝つてきた尾根を境に東側を漠々たる霧に埋め、男体はそ様の戦場ケ原は遥に下に、白根一帯はその果に、三笠より、山王帽子さての全容を表した。完全な火口跡を持つ太郎山は幾条もの恐しい雑を引いてい知れぬうれしさだ。

三人で飯盒一つ空けて十二時急な降りにかゝる。降りには航目が逆にあひ易い。十二時二十分大真名子との鞍部へ出て又登り出す。もう小真名子な登りを終つて平らな尾根になり一時十分再び大真名子の頂上へ来た。霧が深くなつて来た。雨がぽつ〳〵やつてきて、下の方で雷が鳴り出しかゝる。

千鳥返しを過ぎ、炎の中を降り薙を渡つて雑神像の下へ出るまでは小休みだ。笹の間を抜けて小舎へ着いたのは二時二十五分。雨もなく驟雨が雷と共にやつてきた。

尾根に当る雨の音をきゝながら、宏いを考へると、淋しいだけに静かなほんとうにうれしい気になる。〃

十一日へ晴ー雨ー晴ー雨ー〃

雨になれば滞在と起きて見ると、日が未だ出ないのではつきりしないが空は一面うす青だ。支度をしてゐる中に日が炎に刺し込んでゐた。炎の中に未だ消えやらずたゞずんでゐた霧は強い光に照さされ、立ち列ぶ黒木に阻まれて白い幾条もの光となつて炎を貫く。山の朝は歴一つない。

ゆつくりして八時二十分出発。小舎の隅に寐てゐるのが憧れの山に来たことつてそれを渡り、炎の中をどん〳〵行くと八時三十分小舎の潰れた跡へ出た。四つ五つある。八時三十二分道は御沢（ミサハ）に合した・石のゴロ〳〵した水の無い沢だ。前が崖になる。太郎山が正面に見へて道は左の草地を行く。

沢を右にみて降る中炎を通して戦場ケ原の向ふに金精の赤い岩の頭が見へる。その左に半ば雲にかくされた奥白根の尖頭がある。天気に恵れたうれしさにどん〳〵時五七分だ。左から沢が合してゐる。五万分男体山の志津からの道が脚沢をしばらく降ると又沢に出た、八沢に合する処だ。岩の大きい歩きにくいので九時拾分太郎山へ着いた。太郎山の裾の続きがこゝで脚沢と合してゐるのだ。此処からは太郎と男体は

始んだ同距離に見えて、頂上を岩で飾った雄々
戦場ヶ原へ出るには早いので、登り口だけで
左を行けば又二分し右のを少し行くと沢から左
は小石が処々に積んであってよく分る。十時五
。十分許り行くと沢の両岸が高く迫ってきて、
頭に感ずる。正午近く右岸の岩から細い滝が落
らくは水があって、高い両岸に未だ続く。
十二時二十八分やっと両岸が低くなった。沢
雑然と横り、その奥は白樺の鮮な台や、落葉松
が出てきて、それが喬木の疎林を貫く。戦場
と見覚えのある光徳沼の大きなブナの木が早く
への道を横切ると、一時にはもう僕達はさいや
てか水鳥が十数羽沼の静寂を破って舞上った。
にいざく。
この前来た時には砂地に張ったので、今度は
の何ふには、眉を怒らしてふん張った大兵名子
と、その後に小さい急な
事にした。落葉松の林
小兵名子が雲一つかゝ

らずに坐り、その右と左に男体と太郎が夕の雲に半ばかくされてゐる。

　入チツチも終つて焚火が盛になると沼からはもう夕霧が立ち出した。

腹が焉鹿に空いてきたので考へてみると、三人降りに夢中で昼飯を忘れてゐた。あんまり腹が張つたので散歩に行かうと飯盒二つ三人で平げた。ピカく光る星が一つ、今にも

と飯が出来て飯盒二つ三人で平げた。あんまり腹が張つたので散歩に行かうと

つて歩き出す。

　三本松の茶屋でおばさんの出す茶を飲んで

つて西の空には、広い戦場ケ原を縁取る唐

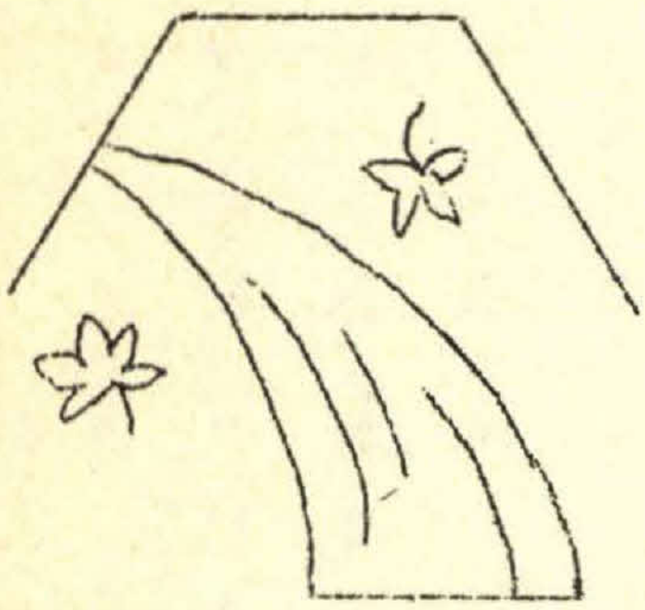
うにまばたいてゐる。

　もう八時に近いので引上げる事とする。黒雲に掩はれさうす黒い雲がひろがつてきた。

んに云はれて茶屋を出る。露深い草を分けて、白樺の林を抜けるともう真暗になつて沼のほとりの天幕のそばに帰ると盛んだつた焚火は一つの赤い炭になつてゐる。天幕に入る雨が天幕に降りかゝる。

　十二日へ晴ー雨ー晴〜

　降る様な星月夜に男体がぼんやり浮んでゐる。今日も天気だ。大真名子と小真名子との間から大きな日が昇ると男体の半面は赤くなり、炭も泉も輝き出して静な光徳沼は一つの赤い炭を投げ込んで八時十分、なつかしい沼を後に輝く泉を三本松近迄来る。三人三本松へ何ます。天幕をたゝんで



奥秩父釜沢遡行記

吉沢一郎

自分は此の十月下旬、塩山より広瀬を経て笛吹川の上流、東沢を遡行して、甲武の国境山脈の一部へ出て見た。釜沢といふのは東沢、西沢合流点即ち二股より約一里ばかり上の、沢の二分した右の方を

岳から大岳迄が全部出る。黒くて丸い温泉岳の岩の金精となる。その手前左は外山の大きな尾根である。外山の尾根の右に低くなる処迄か彼方に一はないらしい。思ふ存分眺めて茶屋を後に原を行く、いつ来てもいゝ原だ。

森が終ると白樺の林で前よりも道がよくなつ祠着。大平でしばらくく雨を避けて三時二十五分場に何ふ。

振りかへると笛吹川奥の赤薙、女峰は斑らな雲に飾られて、丸山から赤薙は夏の日に鮮かだ。よく目を据へて見ると、女峰の長い裾の終る処にうすく大真名子に小真名子だ。

四十一時四十分中宮祠に着いた。日光の町から河原に出て停車

菖蒲ヶ沢から湖に沿つて

身返しに着いた。日光の町より、又登つて赤い

指すのでこれが笛吹川の本流とも云ふべきものである。此の行を為す参考とも為すべき教種の紀行文を読んで見た。然し多くは実際とは多少異つて居る事を鼓見したのである。これも一度位通ったぶっけの人に詳細を求めるのは無理であらう。後から後からと行って完全なものを作りあげるのが山気宗徒の責任なのであるから。

自分等は案内者なしの関係上非常に苦んだのであった。但多少なりとも部員諸氏に参考ともならば非常に嬉しい。

まづ塩山から広瀬までは秩父往還を北すればいゝのだからこれより先を書いて見る。広瀬の部落を離れると径は仇先盛りの草原となる。暫くがあるがそこで道は二分してゐる。右は雁坂峠へのもので左にトロ道くとやがて雁坂峠に発する峠沢の下流なるクド沢を渡る。に沿ふとすぐ左手に河原に向ふ小径がある。区らしいものがある。小さな奇麗な橋の下方に炭焼小屋があって僕が通った時川を渡る頃子酉川は俄然左に曲る。次に通るお神さんらしいものをといでみた所だった。又ク沢にもあってこれには昔と異い橋がある。橋がかゝって居る事を鼓見しいのが沢の水で米らのドウを見下ろす事が出来る。へ地名については附録地図参照)

二股の小屋はすぐ下りとなって丸太を平らたく切った橋を渡って東沢の右岸に移ると一寸した木の繁った中にある。小屋の内部に拳生たりとも泊るを禁ずと書いてあるが御料林の役人は大概居ないから一通しよく可なり涼しかった。然し雨露を凌ぐにはまあ充どん〳〵泊るべしだ。しかし泊った形跡のない称に跡片付ら此処までは別迷ふ秩な道はないし東京を夜行で出た翌日の行程としてあるから若し小屋へ泊る積りなら、バラ平か雁坂峠への分岐点あたりで畫ト携行をおすゝめしたひ。小屋を出ると径はすぐ左岸へ移る。雑冠谷にも橋が架けてある。日本山岳会の先輩諸氏にテントを持って居るならばもっと上流まで行かなければ損であらう。三十分で少さな沢がある。それから又三十分でどれる。少し登ると径は二分する。左は新道で右に登るのはとても歩き悪いから旧道をとった方がいゝ。新旧両道は二、三十間で合して居た。小屋から約めての人は余り遠の如くに流れて居る。一度踏みはずせばスベルヒゲ入りと称する一枚岩の上をわけは必要なり。里に泊るを禁ずと書いてあと思ふと一層気持ちが悪い。然し最初の難関は針金によって下れるから安と東沢に見る間に呑まれてしまふ。破片はスルく

次は木が渡してあるがこれも頗る不安定なものだ。もう半分朽ちて居る。工夫せねばなるまひ。此の関所を越して五分位の後に再び一枚岩にぶつかる。へつらうとして一歩を踏み出したら以外にも丸太がない。丸太の残骸が何側に一尺程ありにぶらさがってるばかりだ。僕は村尾氏に名ばかりのザイルを渡して通れるなら通って見ろと云はんばかりだ。丸太の端を持っていもらひりユックは九郎氏に托して身体だけで一枚岩にへばりついて見ると guanchorage と handhold が旨い具合にあって渡る事が出来た。自分の考へでは此処は一人では無理かと思ふ。細径によって河原へ降りる。此処までである。これから先はずっと自分の方へ歩くより外はない。釜沢信州沢の落合までは大概河原を行く。水の少ない秋には泉に徒渉が出来るので安心である。山裾を少し登って又河原に降る。自分等は少し同様ついたのでヒゲスリから信州沢釜沢のドウまで三時間かったがこれは休みなしならば二時間位で行けるだらう。此かうた。全く秩父の美は沢にありといふが事実だ。釜沢は落合の所から十居る。一枚岩の上を滑り流れる誠に可愛らしい趣ある滝だ。これは左手を上に出ると此処は又別の趣のある一枚岩の河床で滝になって巻いた方がいい。滝のに水を流したと云った様な所である。ア二に小さな滝が来るこれも左を搦む子板の上へ導く一面のだが一寸滑り易

いから気をつける。ずっと河原を行くと俄然大きな滝にぶつかる。この滝なものだ。右手に太い柏木が滝に寄りかゝって居た。これは滝壺の傍まで反対に右に急な所を登り、花を見て行くと踏あとがあるからそれに従ふ。歩き悪い河原を登るともな登って行くと俄然正面に滝が二つ並んで落ちて居る。図に東沢御料地とある沢と甲の中央の所なのである。花の沢は富士見の支右は即ち釜沢の滝の右を搦まふとしたが少し上の方へ行くと一枚岩で如何にも踏張ってても駄目なので、も一度河原へ降りて考へた。ふと両の滝の本流である。いものがあった。ハ、アあすこへ出るのかと今度は左手の滝の中央を見ると人頭を出し、中央の尾根に出ると下から見たのはやはり踏あとであった。これでやと一安心せたと思って安心したら又すぐ滝だ。やはり釜沢は釜沢で未てみるのだから、又それが目的であるのだむらいくらあっても何とも思はない。覚悟の上と滝の組合せに感嘆するのみである。日光や塩原なぞへわざ〳〵高い金を出して紅葉を見に行く人の気が知れない。但し季生とした。此の滝の地図上の位置は雛冠山の雛花上の隅から出る小さな沢が釜沢へ落ちる所であるらしい。これは一寸石すぐ中央の尾根に取付いて少しばかり急な斜面を登ると崩れたやせ尾根に花へ降って行く。僕等が此処へ降り着いた時は三時頃であったのではのあるうちは如何にして

も予定の小屋までは行けないと見切りをつけ、此処で野宿と決めてしまった。河原から少し離れた所に平地があって丁度旨い具合に梅が五六本あったので其の内二本を柱とし、梅の小枝で小屋がけをしてやって来たが梅のお蔭で大した事もなく焚火も消えずにしまった。四時頃からポツリ雨がやって来たが比較的温かく寝る事が出来た。野宿の地は一、六〇〇米のSommet Pointが釜沢をクロスする所である。これから上流は本流のみを行けばいい、木賊山の西南から出てゐる沢が本流に合するあたりまでは多いから迷ふ事はなし。暫く行くと伏流となり又流れに出る。小滝を一つ越して野宿地より二時間の後、沢が二分してる所へ来る。方は一枚岩となって居る。

後に考へたが此の方が甲武信の西南のがレの下から出てゐる沢だらう。此処で早いが昼飯にして右の沢を登る。やはり水量は此の方が多い。右側を捲んでゐる時ふと後を振りかへると雨あがりの気持ちのいゝ空気の中に国師岳の頭がつてゐた。暫く行く中に右側を捲くのはあまり急で止めて右手の梅の尾根を登る事にした。右手のは太い枯木が縦に並いてあり、上の方は一枚岩となって石塔沢からは霧の如き明るい雲があって、右に長く尾根を引いてゐる。此処で昼飯にして右の沢を登る。やはり水量は此の方が多い。右側を捲んでゐる時ふと後を振りかへると雨あがりの気持ちのいゝ空気の中に国師岳の頭がつてゐた。暫く行く中に右側を捲くのはあまり急で止めて右手の梅の尾根を登る事にした。

ぬ様にしなければならぬ。沢の二分した所から約一時間半位で薮くぶりとなるがそれも大した事もなしに右に捲くと木賊山のがレの東端に出る。

此のガレは地図に甲武信嶽とある嶽の字にかくれてみる。それで笠沢だけの注意丈は書き終えた積りであるが尚不備の点は来春五月新緑の候に再び探勝して見る筈にする

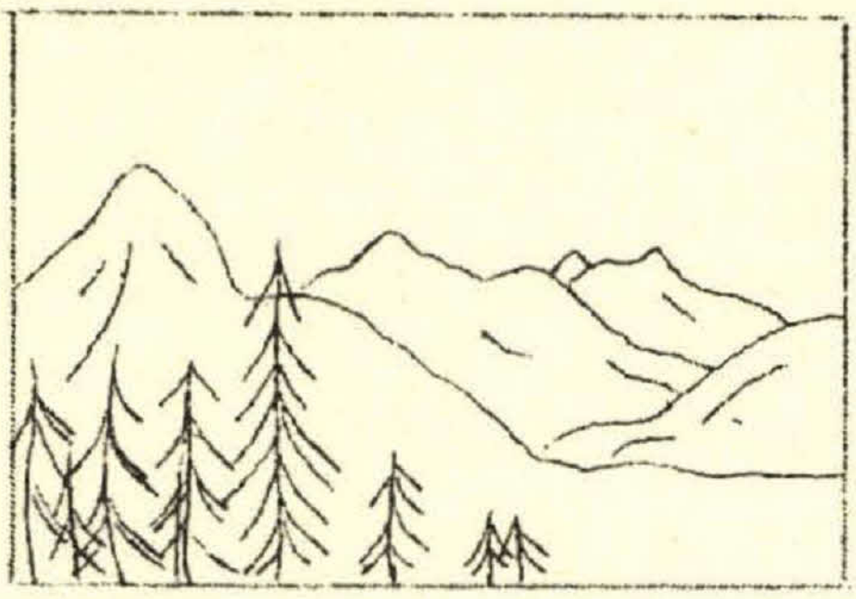
尚詳細を聞かれんとする方は僕か村尾氏か渡辺氏について質問さるん事を望む。

白峯三山

(一)

西山より大門沢まで

小栗吉雄



丈月になるや早速茅九班として白峯三山を探出し、級友曽田君を誘って、三日二人で出発する事にした。紀行を調べて見ると大低案内者が附いてゐるので、大門沢の登るが、一鳳凰、高嶺方面は通ったことがあるので、大門沢の登路がある。一鳳凰、高嶺方面は通ったことがないことにした。これからその道程を書いて見やう。

四日の朝五時四十分甲府に下車。これから鉄道馬車で青柳まで五十銭で運ぶ朝食を済まして西山峠へ向ふ。六貫余りのリュックは易々と出頃の茶屋迄は登らせなかつ

三峯川概念図

地図陸地五万（市之瀬・大河原）

I. YOSHIZAWA

第四図 高地地形図（青森県・大間町）



た。頬から流れ落ちる汗が焦土に吸はれるのを無意識的に見て行くのみだが、余り長閑な気分なので遂ひ四時過ぎ迄休んだ為め、西山温泉へは九時を残れる月影はわづかに足元を明らかにしてくれる。下では早川が激流を温泉は四階建の立派な宿で、湯殿も素晴らしいものだ。翌朝は六時起床。時廿分宿を出た。宿から湯川に降りて早川の左岸を奈良田へ進む。道の傍異の眼も何時までも何けてみた。この村を過ぎて早川の吊橋を渡ると愈々ある。西から大きく這入ってみる広河内へ路を取る。古びた岩石や密な森的だ。路は余りよくない。この沢が北へ大きく廻る迄、専ら右側に沿って泉へ下りて左側へ渡る橋を探がす。それを渡つてから河原を行くと小籠沢(ゴモリ)。今少し進むと大籠沢が来る。午後二時だ。これを渡って本流を上ると直路があるべこれに依らないでも本流から大門沢に直接這入る旧道があるがこの細道を登ると峠の祇をした所に出る。眺望はなかった。こゝから北西へ五沢の河原へ五万分地図の千六百米ライン附近)へ五時着くことが出来た。を越して左側の森林中に小屋を発見した。丁度何ふ側には大蓮沢が落ちてつかりした小屋だ。唯だ眺望がないだけ惜しいが、南アルプス特有の深遠な空気がそれを包んでみる。問題は明日の行程だ。何うして農鳥峠に取付かうか考へたので、疲れ

た身も仲々疲付かれない。二人は交代で火を焚いて、明日の晴天を祈りつゝ眠った。所が不幸にも六日は雨を催して明けて来た。併し一日此処で費してもつまらないことにして、八時出発した。地図と磁石を注意するより外はない。小屋から樹の中を少し登って昨日登って来た沢の上部に出る。急な為め時間がかゝったが九時廿分頃の時点から最初の沢に出会ふ。これを見棄てゝ、二十分程登った所に又左上から沢とも付かない小さな沢が殆んど平行に這入って来た。

自分はこれを登ることにした。そこから完全に、巌鳥と広河内岳との鞍部まで雪渓が詰ってゐた。傾斜は勿論の平蔵谷位のが続いて、尾根近く百米以上あった。雪の横はひどいガレで足を乗せることの出来ない大きな石ばかりだ。相憎くカンヂキを持たなかったので、専ら靴のエッヂネールを利用して大きなザックザックで登るより外はなかった。谷の上部は濃い霧で埋まってゐる。遂々十時半頃雨が来た。

引返さうかとも思ったが、かなり登ったので、落付いて進むことにした。沢の右側に沢が分れて行く、分れ目に大きな目立つ一枚岩が雲渓に喰込んでゐた。この沢に這入ると狭くはなるが雫が少なくなるので、やっと枝に支へられて休む。雪渓の上は石まじりの水が流れてゐる。右側に岳樺のある尾根が出たので、それでも見えにな岩魂や銀ぽうげが疲れた神経を柔げる。卅分位雨の止むのを待ったが仲々止みそうにないので雪渓へ下りる。雲の中に時々広

河内岳の北の突起が物凄く隠顕する。左側へはとても疲れない。優松の根る。がレは一層ひどくなって。尺場を作っては行くので捗らない。沢が一い優松に這入って行くと、間もなく日的の尾根に出た。三時半だ。岩が積田をなして雲鳥の方へ何ってゐる。尾根の西側は断続優松が残って。その ら乱てゐる。鳴呼。これで難関は突破した。前には三山が雪の中に聳へて

前　承

斯くて二人の山岳巡礼者は、久恋の聖岳白根の一角に杖を立てた。腰々は面を掠めて四望は漠々たる雲の世界であった。時計は四時を示してゐる予定であったのにもう既に薄暗く山の夕べは迫ってゐる。二人は暮れぬ間にの小屋まで行き着かんものと雲霧吹き荒ぶ尾根をひたすらに急いだ五時十た悽の山、雲鳥の頂上へ着いた雲霧は相変らず吹狂ってゐる。されど云ひ滲み、二人は暫し歎祷に瞰った。されど迫り来る夕の怖る無限の愛惜を遺うとした、その時図らずもほんの数分程度か夢にまで見大自然の崇厳相に接した。歎々と声なき怒濤の如く押寄せる渺漠たる雲の姿にて立つ真黒な塊見、北荒川・赤石・の崇高・雄渾な相であるされども

の隠す処となつた天涯巡礼の衣を急がせねばならない。道は二人とも未知の地である。而も
　念々裏鳥を辞レてみる。向ふに来内も
今年最初の通行者である。行手は荒狂ふ雲霧に閉ざされてゐない。行手は荒狂ふ雲霧に閉ざ
唯黙々と南アルプス特有の寂びのある岩の尾根を歩むのみである。今夜小屋へ宿れるか如何かと
思ふと甚だ心許なく思はれた。
　六時四十分漸く小屋に着く事が出来た。
二人は思はず歓声を挙げて転び込んだ。
外は已に真闇である。風雨の一日は将に閉ぢられんとレ
一夜中焚くべき薪を集めた。暫く。
めることが出来た。
　小屋は二間許りの石室である。
打付けた名許りの戸を立掛けて置く丈である。その大きな隙間から冷たい雨と
、外は已に真闇である。風雨の一日は将に閉ぢられんとレ
了へ耿々と燃え盛る焚火に当り乍ら耳を
プ山嶺を動るがせねばならない。行手は荒狂ふ雲霧に閉ざ
きを聞くかと思ふと暫て谷を越えて小屋

馳せ下りて行く。その度毎に身を切る様な風が戸口の大きな隙から吹込んで、その光を震はせる。毛布を頭から引かぶって、焚火を掻立てて、二人は一日の疲れに耳を傾ける時に、大自然の語る力強い音楽を聞く。夜の十二時も廻ったが二人共同時に寐るまいと火が消えて了ふ恐れがあるので交代に眠ることにした。十二時廿分小栗が寐た、一人残った僕は火を守りながら取想の糸を辿ったが二人共同時に寐るまいと火が消えて了ふ恐れがあるので交代に眠ることにした。時々寒さに身を震はせて思ひ出した様に火を掻立て、又毛布に首を突込んだ。されと風雨は一万尺の小屋の夜の尊い印象は忘れ難いものである。

起して交代する。三時に小栗を起して交代する。いが風雨は依然として猛ってゐる。かくて其日（七日）も八日も風雨は荒れて目を覚ますと流石に夜は丸の小屋の周を見えて薄明るく計っては匐松を切集めて焚火に親んだ。暴しの音を聞きつたと見えて薄明るく詰めて夢の様な理想や、家郷の事や、今回の計っては匐松を切集めて焚火に親んだ。暴しの音を聞きつたと見えて薄明るく出して語り合った。詩集を読んだりした。毎日風雨に明け風雨に暮れた他の仲間の事等思ひく育れた天涯孤独の三昧境を味ふ事が出来た。

唯一つ困ったのは出発前から呉命の悪かに大いに迷惑を感じた事である。そしてそれは帰る迄悪くて非常に弱った余り身体のコンディションを無視してはなら

の空に夕陽に輝く、気高い富士の雄姿と、
が暮るゝと共に又風雨となつた。
九月六時頃目を覚ます三日間の暴れ通した風雨
雨は止み時々霧が吹き過ぎる程度だ、眼前には怪
聳てみる、がその頂は絶えず流れてゐる雲に隠さ
も、漸く収まつた様である
も、些さか飽きたので、出発する事に決し。九時
霧の捲くだい広い岡の岳の尾根を辿りて十時十
た雲の為か四辺は漠々たる濛霧に包まれてゐる期
尾根さへも判らない。吾々はさる岩蔭に吹付ける
たが、空しかつた。遂に意を決して十一時十五分
道は誤りなく十二時廿分、吾々は地図にある北岳と
めた北岳は実に厳重であつた、峻厳な山陵は脆い
、その天界を窃かすが如き頂を組織する雲に隠見
を出発して愈、北岳へ向つた。地衣類の豊かに着
る。頂上近くで頭の上の岩角に鞭の仆んで不思議
分漸く、久志の山嶺に立つた。されども標高三千
甲府盆地の燈を見た。
晴れてはゐないが、
を隠けて城壘の様に
気ではないが、滞溜
出発の時に下から見
望は勿論北岳へ続く
霧の晴れるのを待つ
頂上を辞した。幸に
着いた。此処から眺
限つて聳立してゐる
せしめてゐる。一時廿分、昼餐を了へて同処
み乍らひた登りに登
そうに吾等を眺めてゐるのを見た。二時五十
百九十二米の頂は空しく茫々たる濛気の包む

処であった。吾等は此幽寂荘厳の境に霧の霽れるのを待ってみたが遂に十余名残惜くもその頂を辞した。霧は相変らず磁石を頼りに降った。程て困った事には広川原への下り口が判らない。脚下に、原始の針葉樹林に囲まれて美しく光る大樺池が目標となるのに小栗が豫ねて矢作る数はったと云ふ降り口である草原の傾面も雪渓で蔽はれてゐる為か一向に何れだか判らない。二人は霧の尾根を無闇と彷った。漸くて広河原下り道。白雲会し」と書いてある道標を見出したがその傾面は雪の断涯をなしてゐる処ではない、寧ろ外にないらしいので引返って降ることにした。時に五時・霧の海とは云へ五時と云へばもう広河原小屋の近く迄行ってゐる筈だ、小屋は千二三百米も下にある、我々は聊か閉章てざるを得なかった。道は周遠刻だ、広河原小屋の小栗が豫ねて地図と引較べると此処よりつてみなかったよく記録に見る急傾斜の草原に出なければ立止ってゐる事も出来ない位である。さればこそ如何にも美しい若草が天急斜面足滑りが危険取られて真逆らに霧の鬱絨の様に生残って、美しい若い白樺の叢生に縁晴れてみたら又何んなに美しからうと思ったが今は急がねばならない剣二人は遠二無二に幾度となく滑り転びながら馳せ下った。大樺池に着いた時には、膝はがくがくになり、全身の血は逆流したかの如き状態になった。ズボンもゲートル も、破れて実に、惨

めであった。時に六時であった。池は残念にも未だ氷てゐない。池を囲む真黒い針葉樹の縁近雪崩れ落ちた雪が椎高く重つてゐる。小径の後針葉樹の中を広河原へ何ふ。道は泉始の針葉樹の密林の中を縫つて、その下生えの深い薄を踏分けてたどくレも登蒸した倒木が無闇に倒れてゐて、夕暮の木下闇の暗さと共に稍もすると道を見失はせる。されどもその幽邃厳粛な稍たは大自然の尊い印象の一つとして忘れ得ぬものである。暫くして道は、又前にも劣らぬ急傾斜となつた。踏遠開は極度に達した。踏ない様にと思へば捗らず、急がんとせば道は不明に旦余りに暗かつた。されど急がなければならない。二人は唯々爽林を披けて平な処へ出たいと希ひ乍ら、苦闘を重ねて馳せ下つた、大樺沢下流の小さな絡流の傍りに投出される様に降り立つた。日は将に昏れんとし谷の空を罩める霧が仄かに白い一筋の帯をなして僅かに名残高く響いてゐる。此処に宿らんものか、進まんものか迷つたが、地図によくはなさうなので絡流を伝つて無理にも行かうと試みた。石を踏滑らし、分けて数十間進んだが、既に闇漸く危険甚しく旦両さへ注ぎ出た。進退遂の巌壁の、旦雨を避ける様な樹木の蔽ひかぶさつた所をおめて野営する事に意を決した。野営するとて云つても天幕等は勿論用意してゐない。先づ火を焚かうと闇中を模索して薪を集めたが火は如何とも出来ない。吾等は懐しい飯も温い飯も断念せねばならなかつた。

僅かに頭上の樹間に携帯天幕を張ってその下に蹲まった。されども方五尺に足りず小息みなく降る雨は遠慮なく、沫きを吹き掛ける、瓦の下の草地天幕を伝ふ滴水は段々繁くなり防水着を通して遂には様から脊を伝って流れる様になった。我等は目の前に吊下げた灯燈の火を見詰てひたすらに夜の明けるのを待つのみであった。実に堪へられない寒さである。山谷に木魂する渓流の響のみ凄々と高い。

十日午前四時頃目が見える様になった、渓流に沿った炎林の丈を没する様な露地を後にした、昨日の雨は相変らず降注いでゐる。直ぐ右手に小屋の前は野岩川が、六時四十分。小屋に辿り着いた、六時四十分。小屋の前は野岩川が、大分不眠と飢と不快とで疲労悪い勢で流れてゐる、連日の雨の為めか増屋た滞留することにした。直ぐ右手に小屋の前は野岩川が、大分不眠と飢と不快とで疲労悪い勢で流れてゐる、連日の雨の為めか増屋た滞留することにした。

物うい身を励まして衣服を火に乾かし飯を食って前後不覚の眠に陥った。

が降り続いた。

十一日、連日の雨との闘に疲れ且大事な食糧が尽きそう様なので早く人里へ出なければならなかった。如何晃ても、野岩川に沿つて約五里近いらしいのでその道を取る事にした、八時十五分小屋を出て野岩川の右岸に沿つて進んだ。今日は幸にも雨が止んで時々薄日さへ洩れて来る、杖て残ら進んでも、記録へ尤も、古い記録であったし に書いて

ある吊橋に出遭はす否疲労も完かでない。そのうち徒渉の出来そうな処を探めつゝ崖をへづり、石を辷らして十時半頃ユーロ沢の岩壁に遮られ旦、川幅も益々広く水量も多くなるので到底対岸に渡る事が出来ない。そこで上流に引返し乍ら幾度となく徒渉を試みたが、或処では胸まで激流に浸して試遂に十二時五分過ぎに復広河原の小屋迄戻て来て了つた。かくなつた上は理をしても鳳凰山脈を越えて赤薙沢から青木鉱泉へ出るより外仕方がなかつた。我等の頭上に野呂川を覗き込む様に聳立つくとも一千米の高さを保つて、その切立つた様な斜面を雲が切りに徂徠してゐる。針葉樹で蔽れた斜面を渡渉して広河原の鞍部で野呂川を渡つた。後で考へると当時は逆日の風雨の為めに著しく水量が増してゐたらしい、仮河を渡つて晃ると、道のない対岸の急峻な斜面には道標が間断なく印されて、我等はこを頼りに森林を縫つて急斜面を登つた高嶺との間の鞍部に出た。遥か脚下に輝く蒼海の平野を見た時には婚レかて、鳳凰さして尾根を急いた。途中二三度漠雲が深く雲に閉さ此てゐる。時既に三時青木湯迄尚無五時三十分寒河原着・青木湯迄尚二時間半は掛るらレい吾等は、無闇にぎ後川に沿つて馳せ下つた。

されども道半にして日既に没し、道は予期に反して甚く悪く剰へ雨が降り出し、我等は遂に後川の渓谷の藪の中に囚へられて進退遂に谷まつた。七時五十分我等は又明さねばならなかつた。樺沢の野宿にも増した悲惨な雨中野宿の苦を嘗めた。飢と寒さと不眠に疲れ切つた身を励してそこを立つに雨に浸されて冷切つた、力の抜げた様な体を青木の宿の縁側に投出したのは朝の七時十分であつた。

懐へば此度の山岳巡礼の旅は、苦闘の連続であつた。さればと霊の何処かでは、凡雨吹荒る、天壇の歎祷・雲霧捲罩むる山谷の漂浪を礼賛する声を聞く。

小西侯の遭難

矢作太郎

大正十一年の夏、南岳の絶嶺から南方を望み見て、塩見悪沢等の崇高な山相に接して以来、此の方面に対する興味は年毎に深くなつて来たのである

七月六日、曇一雨

梅雨も未だあけやらぬ七月六日我等は市之瀬の橋本屋を出発した。案内及人夫を加へて七人の一行である。七時宿を立つて三峯川の広い河原に沿ふて往く、秋島橋を渡つて松島、岩入と

いふ淋しい部落に遠入る。百二三十米許りがうノ〳〵登ると赤松の茂つた処に出た。路は此処で二岐してゐる。下の道を取つて降つて行くと桃ノ木と云ふ五六戸しかない小径が三峯川の右岸に戸草に来ると云はれてゐる。仙丈岳の彦大左衛門が行手を塞いでゐる。通じてゐる。地図に崖の記号が二つあるが道はその間を通つてゐるらしい。に出た。思右峠の下に出た。ショベラ塩平の部落は頭の上にあるらしい。の渡渉をやる、やがて塩沢渡に出た。河泉に降つて元一旦の橋がある。地図には道はないが右岸を行く。平瀬には三峯川最奥が密生してゐて頗る気持が悪い、市野瀬函幅から大河原函幅に移る地点は右数十米の高処を通過するのだ。遥か下に流るゝ三峯川の水は光つて美しい。再び河泉に出た。北処には製材所の木の香も新しい小屋が沢山あつた。小瀬戸の湯場は間もなく対岸に現れた。湯小屋に憩を下して昼食を摂ます。

雨が降り出した、一、二〇出発、再び河を渡つて右岸を伝ふ、東風巻谷の落合へ登るり、ボを示して呉れた、中山は見上げる程に高い。西風巻谷、悪谷、オツ等幾多の落合を経て又ケ沢の北沢に着いたのは三、五〇だ。この向は地図に依ると単調だが一角を廻る毎に景は更に新しくなり仲々面白い。大曲を過ぎると愈〻神子ケ渕だ、両岸は百米以上の絶壁が続く、三峯川はこの間に入ると畑の様にネツトとして釜を湛えてみる。二十米許り崩潰して河を埋めてゐる処がある。北処を過ぎると三峯川は再び広

い河原となる。小黒沢、大黒沢の落合を過ぎて三峯川は急転して北に向ふ成り宏い、五、五荒川渡のきたない小舎に着いた。雨が降ってゐるので本夕暮の大黒沢の奥、本谷山あたりの雲の立ちづまいは永く忘れられない。

七月七日（雨）滞在

七月八日（曇一時豪雨）

三峯の上流荒川渡は立ち籠める朝霧の中に明けた。僕達は六、三〇出発、て来さうだ。荒川は河原がずっと狭い、雨のために水は狂ってゐる。七、〇に着いた、水量は相方同じである。国境尾根の二、六七〇米位から北方一のてイエナギの頭へ、二四七）を経て南北荒川のドウへ降りられる、イエナギの頭からならば何れを降ってもも南荒川に出られる。曽て梅沢、武田の両氏が沢降りで悩んだのはこの辺の沢である。

南荒川へ入ると雨が急になって来た、二つ目の難を過ぎて二丁許り行くと岩石磊々たる広河原に出た、八時。左岸に洞窠樹に掩はれた平地がある、野営地と云ふのは此処だらう。両岸は南北沢のドウへ来た。二つの沢に挟まれた尾根の先端は急く迫って来た、南北沢のドウへ来た。二つと塩見の方も北荒川低の方も長く延びてゐた。見上るため堤防の様にやせて長く延びてゐた。見上る程の高さはどんなであらう。両岸が恩のつまえぬ・この辺から仰ぎ見る塩見の凄さはどん

風を立て廻した林帯絶壁が続く。絶壁が終ると残雪が現はれる、十時雪渓水なので飯にする。一一、三〇出発、高度は二、一五〇米、三本の雪渓が一直てゐる。霧のために一丁先は見えない。一番西寄りの雪渓をい、雪渓の両側には名も知れぬ灌木が密生してゐる。風が出た、濃霧は盛は依然険悪だ。二、五〇米位であらう雪渓は二分し、俺達は西寄りのを行た、濡木のまだらな岩石の縺つた草地に移つて、しばらく頑張り通すと遠けて二、〇五尾根へ出た。いたいけなコイワカガミが風にあふられてゐる。。名々たる岩峯は俺達を喜ばせた。由来塩見岳は高山植物が豊富なので有名だがその方面に無智な俺達には唯一面の偃松だ。前荒川のピークを越へると二五〇〇猫額大の平地がある。板岩のかけらがうくしてゐる所を、二丁ばかり行くと愈々塩見岳の登りとなる。尾根の右側を巻いて、踏慥たへのないがレを登って行く。一足毎に岩片がちて行った。

三時十分頂上に立つ。濃霧の為め何にも見えない。見えるのは水鼻汁をたらした同僚の面だけだ。冷たい風が塩見沢から吹上げて来て、全身にも雨になりさうだ。前岳に戻って、翌いて行ったりユックを背負ふ。予定を変じて塩見沢を下る。猛烈な偃松の海である。やがてそれ

がなくなると滝木帯となった、雪は少しもない。名て来た。水音が左手から聞えてくる。地図に水のな沢が這入って水量は二倍となる。沢の両側巨木はえもある奴が未だ生々しい折口を出して、紋様にみる内に中俣との出合いに着くことが出来た。キは晴れて明日は通るべき小河内岳がキラ〳〵輝いて居た。

七月九日：曇一雷雨

六時廿分出発、大井川上流の奥深く這入った寺びは近かった。左手の谷に入る。当に似た美しい鳥が水の辺りで囀ってみた。

非常にゆるやかな登りなので路は捗る。小屋は骨組だけで屋根はない。二千五百米のコントールラインの小屋から二つ目の沢を左へ登ると水は消えてしまった。小屋の右岸の潅木の間の沢だ、処々に滝が走ってみる。谷の両側の潅木と草原との記号の間を登って行く。登沢から吹上げる風に濃霧は大雑把を始めた。やがて本谷山はその全容を現はした。雨に洗はれた偃松の緑は実に美しい。偃松を分けて少し登ると忍にして尾根に出た。尾根の南側即登沢の水源は恐ろしい絶壁だ。白霧が湧いてみる。白山イチゲ、岩鏡が美しい。九時から

愈〻長い尾根の縦走にかゝる。優松が一
に足を取られながら、御料局の三角点に
越えると、小河内岳の登りとなる。頂上
があったので御茶を煮て飯を食ふ。甲州
畑が制然と見える。富士が雲の上に頭を
現はれる。十二時十五分小河内岳の頂上
及び、黒木がすっかり蔽ふてゐる。優松
を失い易い。一時四十五分小日影山の岩
新聞記者岡が青息吐息した難場である。
詰らぬピークだ。油紙で雨を集めて乾いた喉を潤ほす。
引かぶって煙草の煙ばかり見つめてゐる
て行かうと俺は声をかけた、一同無言
覚えてゐる。

小西侯の頭を左に、ラ、んで、東側の鞍
い雪が鳴り初めた。ハツと思ふ瞬間、俺
達のピッケルは救間飛んでゐる。同

は猛烈な響を立てゝ襲って来た。疲労落雷の危険。こう考へた俺達は無意識に足跡を求めてた
に巻き初めた。暫くして新聞記者団の野営地に着いた。失神した様な状態で辛くも此処にたど
り着いた時、初めて人犬が行衛知れずになった事に気付いた。既に時計は四時四十分を指して
ゐる・声を揃へて呼ぶが何の応へもない。三人は手分けして附近を模索することになった、疲労
十分となった。雨は尚一時間捜索に費したが皆目行衛は知れない。薄暮の迫るに従って不安の念は一層強くなって来た。やむな
く、野宿をして一夜を明かすことに定め水を得るために急傾斜の沢を降り初めた。沢は深い雪
に蔽はれてゐて滑る危険である。疲労空腹寒気のために無感覚となつたのか手足が岩に当って
も少しも痛さを感じない。雪渓が終って水が流れ出したが、三人を容れる様な空地は少しも見
出し得ない。両岸は攀ぢることを許さない。一時間近くも降ったらう右手から大きな沢が落合
ってゐる。その落口は五六尺の滝となってゐる。その附近の河原に地を送
んで徹夜の準備にかゝった。時に六時四十分である。渡辺が疲労を忘れて立水を倒す　幸に雨
は小降りだ。焚火が盛んに燃え初まると空腹が俄かに襲って来た。吉沢の飯盒の底に昼食の残
りが三分の一程あったので水で一パイにして加へて食ふ。梅びしぼが唯一の副食物だ。渡
辺は蓋まで刮め尽した。飯盒でお茶を沸す。リュックから防寒具を出して着る。吉沢は全部人
夫に預けて置いたので何も無い、渡辺の毛のシャツ、俺のスエターを借りて着る。俺は懐中電

燈を持って居たので河原の流木を探した
レた様に「此の辺はどうも夢で見た様だ」と不安そうにあたりを見廻して
は此の言葉を聞いて、思はず身震ひした。

七月十日　暴風雨

はっきり目を覚したのは三時頃だらう。
幸に焚火は今朝まで余命を保ってゐた。四
立木が風に靡く。弥々嵐になったらしい。
配になって来た。俺は立木を切りに出たが
成る努力を要する。渡辺と吉沢が焚火の番
た英蓙を屋根に葺いたが、豪雨はそれを容
に大洪水となった。身体はすっかり濡れて
頃焚火は遂に断念せざるを得なくなった。
「もう駄目だ」と心細げにつぶやいた。俺
発の一週間ばかり前だったらう、俺は筋道
みたのだが、渡辺がもう駄目だ」と云っ
は一時気が遠くなった様に感じた。

一平は炭火に向けて眠ってゐる。雨は小降りだ。
幸に風が烈しくなって来て、ゴーツくと音がして
時頃雨が烈しくなって来て、ゴーツくと音がして
立木が風に靡く。弥々嵐になったらしい。凌ぎ易い。焚火が心
配になって来た。俺は立木を切りに出たが、小さい信州鉈なので立木一本
成る努力を要する。渡辺と吉沢が焚火の番をしてゐる間に俺は屋根を作る
た英蓙を屋根に葺いたが、豪雨はそれを容易に透して仕舞ふ。腰をおろし
に大洪水となった。身体はすっかり濡れてゐる地面は雨の海
頃焚火は遂に断念せざるを得なくなった。此の時だ。渡辺は傍で木を切り倒してゐる俺を見て、
「もう駄目だ」と心細げにつぶやいた。俺は脊筋に冷水を浴せられた様に
発の一週間ばかり前だったらう、俺は筋道の判然とした夢を見た。そして再びゾッとした。出
みたのだが、渡辺がもう駄目だ」と云った悲痛な場面がその夢の中に思ひ出された。俺
は一時気が遠くなった様に感じた。

急造の小屋に這入ったが、狭いので身動きも出来ない。りユックサックを側に積んで横なぐりの風雨を避ける。前には俺の油紙を貼って風を防ぐ。俺のりユックから二枚づゝ食ふ。十二枚しかない。二枚づゝ食ふ。

十一時頃だ。猛雨、

一時頃だ。胴震ひ烈しくなる。

増水した沢の音と嵐の響で耳が聾してしまふ。

が付いて時計を見れば午後五時だ。これからあの長い恐しい夜となるのだ。

ンーセージへ六寸位しをナイフで切つて二枚づゝ食ふ。風雨は更に猛烈となつた。

で尻や足が痛くなる。渡辺が再び胸が痛いと云ひ出した。暫くすると吉沢の腰をしつかり抱いてやつた弥だ。

。俺は後から吉沢の腰をしつかり抱いてやつた。帽子を探ぐつて尻の下に敷く。心細くなつて来た。夜の

真暗になつた。

セージを三分して食ふ。残つてゐる食物はもう早や堅筈二本だけだ。吉沢の胴震ひ烈しくなり、

唸り声を出すので心配になつた。絶えず夢見る、良い夢ばかりだ。銀称と話をしてゐる夢や、人

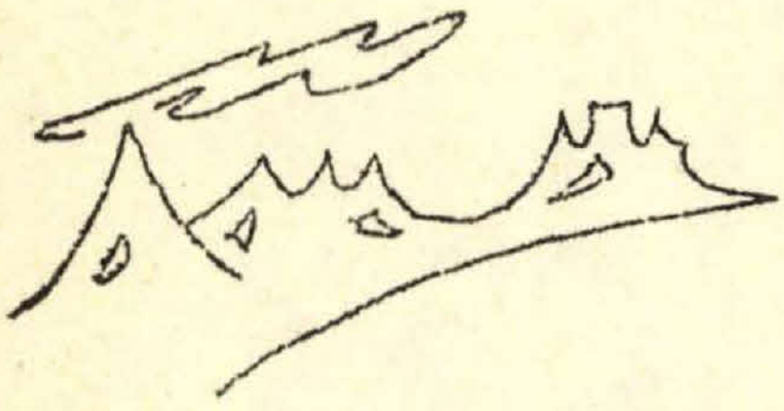
夫たちと飯を食つてゐる夢だ。意識がぼんやりしてゐるので、夢か現か判然しない。二人の友

が遂に死んだ光景が意識に上つて来る、俺一人が二つの屍を護つてゐる光景だ。

七月十一日　雨ー曇ー雨

恐しい夜は明けたので、火をおこして着物を乾かさなくてはならない。雨が次第に静かになつたので、火をおこして着物を乾かさなくてはならない。木を切りに出る。一本づゝ倒した後で逃げ帰る。又二三十分して俺が出掛けて漸く三四本倒して下積みにする。俺が出掛けて漸く三四本倒して下積みにする。吉沢がそれを細かく切つて俺の待つてゐたマツチ箱の様に唯一打皆湿つてゐた。吉沢のノートを出し乾いてゐる部分を千切つて焚附けにする。火が附く筈がない。探灯の底に附いてゐた燐を剝がして使ふのだ。二時間ばかり頑張つたが仲々燃え出さない。六時三十分だ。俺が盛んにノートを燃してゐた時に、突然「お早よう」といふ声がした。中年の頑丈な男が二人立つてゐるのだ。俺達は夢ではないかと疑つた。鮭釣りだ。比処から二町ばかり下流に小屋があつて、其処で昨夜泊つたのだといふ。荷物を纏めて、その小屋へ行くどうして俺達はこんな立派な小屋を気付かずにゐたのだらう。漸く飯にありつくことが出来た。此の時食つた鮭の味は忘れられない。俺達は完全に蘇生したのだ。豪盛な焚火で濡れた衣類を乾かす。

又時四十分。大急ぎで出発する。二日二晩の荒れで、沢は増水して到底登れない。沢に沿ふて山腹を攀ぢる。一時間ばかりで一昨日雷雨に遭遇した小西俣の鞍部に出つて高山に向ふ。僅に足跡はあるが、漁師でなければ知れやう筈がない。途中一休みもせずし



槍から穂高へ

小泉吉雄

北アルプスの岩と雪。白雪皚々の槍ヶ岳の頂が靄にその雄厳さを拡げてみる。梓川の流で

て、高山の御料局三角点に着いた。此処から高山沢に沿ふた尾根を一直線に四五百米降つて、稲岳組出材所に荷を下したのは十時三十分であつた。宮下三郎氏の家だ。心から吾々を歓待して呉れた。

二時。怠ろなもの、てない、に拳く礼を述べて大河原に降る。急な降りで歩き難い。板屋谷の一番の下の瀬の所で谷を渡る

夕立の黒雲が盛んに飛んで来る。

三時三十分。小渋湯への奥線の路に出る。非常に広くなつた。夕立が屢々襲つて来る。僅か荷登りでも、仲々こたへる。釜沢神社へ着いたのは四時半だ。釜沢の部落は山腹に階段的に発達して急坂である。俺達は二汗も三汗もかいて漸く登りつめた。ねばならぬ。俺達は二汗も三汗もかいて漸く登りつめた。そして釜沢の広い道に出た。坦々たる大道を行くこと一時間半、やがて大河原市場丸川旅館の客となつた。

頃を洗ふ頃には、対岸の草原では何処かの登山部が朝餉の用意をしてゐる。静かに立登る煙の上には、穂高の雪が黎明の空気の中に輝き始める。廿四日は定刻に焼岳へ登る。廿日は忘れられない。廿一日は敎生小屋までだ。一緒に行くはづだつた友達が皆都合に依つて駄目になつたので、案内と二人で登ることにした。八時五千尺を立つてから七時間で小屋に着くことが出来た。その夜は降りそうな雲行が一面空に懸つてゐる。翌朝は四時起床、雑踏の小屋を出たのは五時半だつた。鏡の雪渓を登つて肩から大喰岳の方へ尾根を伝つて行く。大した登りもなく、しつかりした岩の上を踏んで進む、大喰・中岳は何んなく過ぎる。途中大きな雪田があつて、前方の峨々たる北穂高、前穂高等の岩峯と云ふ感じは、南岳へ地図の北穂高岳）の頂上に立つた時は六時五十分だつた。西の方には笠の連峯が、名前の通りの形でひかへてゐる。先に時間がかゝるので、ゆつくり休めない。少し西の方へ尾根が曲つて、優松の間を進むと、南岳のキレットと称せられる、痩尾根を越さねばならない。鋸の歯と云ふ感じだ、下りの多い所へ岩がくずれ易いので気持が悪い。七時半頃キレットを下りつめて一寸した戦部に着く、雪が少し残つてゐる、直ぐ頭の上には北穂高の岩壁がぶらさがつて、まるで屏風の向にはさまれた様だ。これからがこの縦走中の一番の悪場になる・見た所登れそうにない気がする。敎岳の岩登りより一寸急だそして岩は一番崩れるので、最も注意を要す

る。レフかりした足場がないので休むことも出来ず、専ら足本とつかまりながらして登る。殆んど垂直な様な所が一箇所あつた。こんな時は余りゆっくりやると、怖気が出るし、早くしやうと思ふと足本が危い。これを登りつめると、少し登りになつてゐる所があつて、岩たしがみが付いて、それを流れてる水で洗ひさくくの唇を潤ほす

居られなかった。非常に惜しまれる御湯さ
い杯にと頼まれて十二時廿分こゝを出発した
た。世分で奥穂高の頂上に着くことが出来
くその積へも大きい。西の方に天狗岩が或
みる。東側は大残雪が唐谷へ連らなって、
こまで上りも下りも一時間一寸で出来る距
んだ顔を冷やりとさせて行く。前穂高の奥
止めば全くの静寂だ。憧れの峯に立った
で沖つくり出来ないのが残念だった。こゝ
で岩燕が鴬いて雪渓の方へ飛んで行く。二
峯の全容が初めて眺められる。槍の英・北穂
てみる。残雪はそれ程に張り付いて一層の
初めとして采配・御岳が静かに並んでみる
居る。梓川はうねって流れて行く。
旅舎からは夕餉の煙が上ってみた。三時
に一枚岩の難場がある。これを過ぎてどん

を張って僕の帰りを待ってゐてくれた吉沢爽竹の両氏に喜びの顔を見せた。湿たかい力レーライスと汁粉で大いに脚馳走になる。燦らめく屋の下、三人は枕を並べた。翌朝は糸毎に何ふべく白骨温泉へ梓川を下った。

八ヶ岳

小　栗　吉　雄

部室では十月二日の即月晃旅行が企てられた。自分もそれに加はる心算りだったが何んだか今度は独りで何処かへ行きたい気持になつた。澄み切った空ほ懐しい南の駒、地蔵、鳳凰の尾根や目的の山々を帯に展開させて、孤独な車中の自分をなぐさめた。去年は小渕沢から登ったので今度は茅野まで乗る。簡単に記録的に書いて見やう。

四日の朝八時半茅野駅に下車して、本当の茅野の町へ戻る。この日は午前半日で頭張る予定なのでかなり急いだが、リュックの重いのと昨夜飲んご眠られなかったので、進むにつれ段々スピードが鈍り、小屋場村は十一時に通ったが、製板小屋へ時二時までかゝった。こゝから柳川の上流を湘って頂上の小屋へ登るんだが、製板の主人が暮れるなんておどかすので、盛んに勧める赤岳鉱泉へ泊ることにした。

れば宿だった。年頃の娘の案内で二階の六畳に落付いた。宿の周囲はすつかり密林が取巻いて、沢の流れが沈黙を破つてみる。窓からは赤、黄、緑、紫、硫黄、の岩角が針葉樹林の上に夕陽を受けて燐えてゐるのが眺められる。田舎丸出しの言葉で娘が尾根への路を説明しの栞な線が優美な姿の中を真上に向つて登つてゐる。即湯は奇巌で温かい。五が、やつぱり秋だ、昨日の天気はすつかり変はつて周囲は霧で何えにも見折角の明月見も残念乍ら諦めるより外はない。独りで若んで登るのも面白時々頭を霧の中に見せる阿弥陀から取附くことゝ通つて、そこから急な沢を登つて中岳と阿弥陀岳との鞍部へ出た。途中路へ右へと沢を取れば確かだ。奥の小屋から四十五分、霧の中には確現だけ例の風や有吊橋が凄く雲の歌を受けて迫つてゐる。阿弥陀の頂上までは何往復して中岳の登りに掛かる。これも楽だ。しかしこゝで困つたのは赤岳だつた。阿弥陀から雲の間に一寸見たゞけの猫念配だつた。踏跡は殆んど消えてゐるし長い急な力つてみた踏跡を頼つて、やつと頂上に立つたのは。寒いし、身の周りは真白で仕方がないので急いで小屋に降りる。去年の呪はしの小屋だ。漸く汗は暴れ出した。ぐづくづしてはならないと、飛ばされさうな帽子を押

八作ら歩みを急がせた。両側から吹上げる雨まじりの風は、偃ふ杯に横笹にふらつかせる。目の前に時々岩が現はれるとつまる杯な疾風が吹きまくって来る。尾根の上は荒漠として、休憩することにしたが、海ノ口方面が飛んで行く。標高呉の比較が出来ないので何処の突起に居るか解らなかったと想像して、横笹の最高呉だと思ふと、直ぐ呼吸の二度目の昼食を取った。凍った杯な八ムもパサくの飯も有難い。山はいへ下る道が出てみたので、横笹の最高呉だと想像して、休憩することにした。岩呉に這入って惨残打ちのめされた自分を守ってあてくれる杯な気がして、恍れて居る岩にも足元に震へて居る苔桃にも限りない感謝の情がそゝがれた。大自然の寒虐か、愛か、自分はあったが岩の下から水が落ちてみたので吸って行く。硫黄呉までの路は知らない。唯だ喜びと感謝とが心を把らへてみた。一時十五分こゝと別れて大ルミに何つてその三角呉へは丁度二時に達せられた。こゝから夏沢峠へ出ない新道に依って本沢温泉の前へ出たが、急な斜面を下りたゞけあって、一時間で済んだ。まだ小海駅まで四里以上あるので、最終の七時には危ない。大いにあはてゝ広い道を一散に下った。詩趣豊かな裾野の変林帯も、広大な放牧場も味はふ暇がなく、優雅な松原湖は五時半頃通過したが、忙しいネールの音はタ方の湖とは調和しなかった。も少し早いと湖の下の八那池から駅まで自動車が出るはずだったが、もう歩くより外はない。暮れて行く街道の先には村々の燈が光って来る。発車三分前にや

松本謙三

つと駅に飛込んだ。

日光より平ヶ岳へ

五月二十七日・小雨　上野ー日光ー戦場ヶ原ー泉ー湯元

五月二十八日　曇

湯本六、四〇ー金精峠八、三〇ー清水九、二〇ー大尻沼十二、〇〇ー中食十二、四〇ー

上小川三、三〇ー戸倉六、三〇。

宿を出て三十分も行くとそろ〳〵残雪が現れる。段々雪も多くなって一時間もすると雪を踏んで登る事となった。振返ると金精山が顔を出すが遠くは一すも見えない。峠を下りにかゝるとケヨイ〳〵道斤かどらない。やっとなかく

雪もなくなり十二時には大凧沼の辺に出る。相変らず雲は晴れない。白根も見えなければ温泉も見えない。白根も見えなければ温泉も見えない。立派な物である。相変らず雲は晴れない。白根も見えなければ温泉も見えない。

々たる道を小川に沿ふて下る。一ノ瀬の人家を右手に見下して白根温泉の所で道を右手にとり、

上小川へは三、三〇につけた。白根温泉には宿が二戸其の他に二戸ばかり人家がある。

小川からは鎌田に出るのも雪麻らしいので裏の山を越えて易く土合に

出て六、三〇。過ぎにやつと戸倉に着いた。此処には宿屋は一戸しかない。

五月二十九日　曇後晴

戸倉七、三〇―鳩待峠一一、三〇中食一二、〇〇―至仏山頂上二、二五―水電小屋五、〇〇

菅蒲平から尾瀬へ行くのなら早く出発せなければならぬが鳩待峠からなら至仏へ廻つても泉々水電の小屋まで着けると云ふのでと時半になつてし出発する予定なのがつい遅れて、まつた。道は笠科川に沿ふて立派なものがある。冬は尾瀬泉へ行くには硫黄沢から菅蒲平に出て行くとの話である。併し今は数がいどく、つて時間ばかりかゝつて一寸も面白くないそうである。笠科川の危なさゝうな丸木橋を三四回渡るとアヂ坂にかゝる。坂鳩待へ行く道は笠科川の危なさゝうな丸木橋を三四回渡るとアヂ坂にかゝる、大して苦しい坂でもない。此の辺からそろ〳〵残雪を踏んで登る。スキーの時節は良からうと思はれる。峠の南側は大して雪もないが峠を境に北方は唯真白である。峠で中食を済ませて至仏への登りにかゝる。夏なら笹でとても登れる所でないが今は雪も堅いので歩き易い。漸らく峠から尾根

を上って途中から右手に頂上をめがけてトンく行く。何のさへぎる物もない唯真白い丈である。北方尾瀬原も雪に塞されてゐる。景鶴と越がもかゝれば充分に雪である。下り尾瀬ケ原めがけて一寸もかゝらぬ中に泉の南西端に出る。雪の泉を埋めてゐるさうだが惜い哉少し時節が早いのでその壮観は見る事が出来ない。泉の小屋と云ふのは泉の北端沼尻川とヨツピ川と合する地点から少し西に寄り地図のヨツピ川の辺にある。宿るにはやはり食糧も毛布も持って行った方が好都合である。

五月三十日　晴　景鶴の肩八時―十一、二〇―中食一二、三〇―小屋六、三〇―景鶴の肩三時半―小屋三時半

一晩中霧がこめて居った為か今日は素晴しい天気である。待った平ケ岳行もまぶしい程な天気である。小屋の裏から二十分もブナの大木林を通っていよく登りにかゝる。景鶴の南の肩から直下する急の谷をぜい〳〵登る。閉息して来たカンデキもはかずに肩に出た。煙霞の平ケ岳は白沢谷を隔て直ぐ目の前に大牛の如くのさばり反ってゐる。一昨々年越後から八海、駒ケ

と登って鉢山平に遊んだ時中ノ岳から眺めた所、燧は流石四囲を圧して聳えてゐる。利根本流の山々が真白に並んでゐる。約三時間半位で平ケ岳の頂上に着けた。流石に名の如く頂上は広い。越国境の山は雪霧の為に明かには見えない。白沢山へと再び取りついた。白沢山の南側に唯一つ大きい岩が突立つてゐる。景鶴の肩まで来られる。登りには三時間位で見るとなかく〳〵至仏の尾もよい。むつゝりしてゐた時半であつた。小屋には凡そ三時半であつた。小屋に帰つたのは大疲労を折つた下名もわいてゐる。目実際感じのよい人で水電で用いたそうである。

五月三十一日　曇後晴

小屋六、三〇―燧岳登山口へ尾瀬沼の西岸へ尾瀬沼の東端一、一五―中食一、〇〇―戸倉六、四〇

三丈ヶ滝へは今でないと晃に行けぬから是非見物して行つたらよからうと話はれたが今日中に燧に登つて戸倉へ行く積りなので殊念ながら見合せた。三丈の滝は高さは華厳の滝位であるけれども木量の、多い事はとても比較にならないさうである。ヨシピ川を南に渡つて川越岩辺で沼尻川を渉らうとしたが雪解けで増水して渡つて又左い泉を東に進み漸くして沼尻川の右岸々々と沿ふて尾瀬沼に出た。此れまでの道は所々に残雪があり雪も消えたばかりなので滑つて困つた。地図に長蔵の小屋とある所には今は何にもない。遂缶への登路は雪で道も解らぬが夏道と同じ所らしい。沼の西端から東端会津との境にある。三角兵のある峯に登る一番左手の沢をニニ四〇の地兵に登り左手に一突苞を見ながら右に巡つて二。頂上六ヶ十米は雪も無くはひ松の間に立派な道がある。頂上にはトタン張りの筒の様なお宮がある。頂上へは行つた丈で霧の為に何にも見えない。三角兵のある峯と真西にある峯の間の大きな沢を下りても尚に尾瀬泉へ出られるさうだ。但し雪の時だけの事である。遂の下りも又キーの様な、痛快の味を味つた。二十分位で沼のほとりに出る事が出来た。尾瀬沼は未だ雪で大部分塞されてゐる。千ヨイく雪渓も浮いてゐる。沼の北側に沿ふて会津街道に出で長蔵の小屋で中食を食ふ。丁度長蔵さんは留守なのでホラを聞かせられないで済んだ事も幸の一つである。長蔵は会津の檜枝岐の神主であつたが村を追はれ世を捨て此の地に来たのださうである。

自称故横田千之助氏を親友の由。一時過小屋を後にして三平峠へ尾瀬峠へ
では丁度晴れたので心行くばかり燧を眺めて上州へ下り始める。天がク
の道を先ふて下り鉱山の跡や東電の見張りの小屋等を通り戸倉に
あつた。
尾瀬の伝説燧岳の伝説・これにからむ人々の伝説は沢山あるけれども北
六月一日・晴
戸倉六、三〇―道貝一一、三〇―中食一二、一五―沼田四、〇〇
無味乾燥の会津街道を下る。併し何とも言へぬ元気と喜びがある。

雪の清水越へ

松本謙三

上越沿線スキー好適地視察傍々スキーで清水峠を越えて沼田に出て見たいと云ふので三月二十二日長岡を出発した上越線は未だ塩沢までしか通じてゐなかつたので塩沢から湯沢へ向つて雪の街道を入キーを脊負つて歩き出した。此の辺は積雪五尺余・三里近くして岡山村へ(石打村)に着く。此の村の西側一帯は傾斜も緩かで・そこに斜面は北向きと東向きなので雪質も大変良い立派な練習地になるが唯温泉のないのを惜む。次に上田富士の南向きの緩斜面であるが広い

広い久キー場があるが、此処で練習するには遠又村に根據地を置くとして南向きの斜面の為に比較的雪質も面白くないと思はれる。石打村の南一寸半里位逢沢に沿ふて登ると道が右岸に移る辺である。此の辺で最も良い久キー場は土樽村から附近に練習する林な所もない。此の辺で最も良い久キー場は土樽村から舎がある。風呂は電気風呂である。併し多人数の宿泊は不可能である。宮舎をそのまゝ残して置いて呉れたら此んな良い練習地はない。雪量は三月の末でも八尺はあるし練習場の広い事は関や赤倉も及ばない。山へ登りたかったら万太郎山迄行く程ある。」一度は遊びに行ってみる所である。

廿五日朝六時宮舎出発逢沢の右岸を行く。所々雪崩の跡が固くなって越す。万太郎谷、茂倉谷、松又谷と別れる辺から傾斜もそろくかまひなくぐんぐん登る。夏道が左に谷と別れる辺から傾斜もそろくく登る。夏道が左に谷を越して行きつまって三本の急な沢に分れる。此処まで約二時間を費す。一番右の沢の大きくザックザックを書いて登る。何の雪崩の心配もない。って来るので左手の尾根を登る事に決めスキーを脱いで尾根の大木の間を縫って行くなく露で一寸も上も下も解らない。唯一寸晴れた瞬間に逢沢を隔てゝ一、三〇〇米の辺で谷も行きつまって天候の異合が余り面白

けても震へる位である。それと共に雪が吹々固くなつてなかく〳〵エッヂをつける事が出来ない。トップに立つ丸工君はなかく〳〵ターンをしない。ターンする度に前附けをする為に大変の労力を費さねばならん。それ所か滑り落ちたらいかん。それ所か滑り止まる事はない如何しても沢がで逆戻りをしてしもうからである。遂にスキーを抜く事にした。皆が入キーを何ふ。風が強い為に所々笹が出てゐる。遂にスキーを抜く事にした。皆が入キーに出た。が一体どの辺かも霧で見当がつかない。夏道から尾根を少し南に寄つた突起の上らしい。兎に角白樺小屋跡で昼飯を食ふ事として右下に何ふて滑走を始めた。らしいものは見当らない。その中に霧は小雨に変つて来る。流石に上州側は暖である。雪のよい谷である。雪はじめく〳〵してゐるし脚も大部落ちたので面白武能に出てみる谷である。雪はじめく〳〵してゐるし脚も大部落ちたので面白かなかつた。武能の辺の凄いのには驚いた。どツ小屋山の方から出てゐる谷い事何とも言へぬ谷一面凹凸してゐる。各々の下つた沢の武能で此の谷と一大キレットになつてゐる。向ふ側に渡らうとしてもなかく〳〵出来なかつた。滑走で土合まで何の面白い事もない。唯右手の沢はどの沢もく〳〵雪崩で素晴しい大木も湯檜曽川に押し出されてゐるのには青くなつた。

土樽から峠まで約五時間下り土合まで約三時間半、土合から湯檜曽までは一ノ倉に来たら雨となる。

が滑る事は滑べれた。温泉についたのは三時半頃であった。

上州側には此れと云ふスキー場はない。谷が狭い為に練習地はない。谷川温泉から十町位入った所に大きな練習地があると云ふ風に小日向で聞いたが、一寸も雪がないのだから押して知るべしであると思ふ。

年報　（大正十四年四月以後）

△五色温泉スキー練習。

五十嵐敬馬、浅倉重継

四月六日―九日

スキーのシーズンを過ぎて居たので雪の状態が適さない。又日に高倉山に登る。時間半、福島、米沢の盆地が眼下に広く展開されて東北の尤物朝日岳も遙かに望まれる。温泉から二に至る複雑な尾根が手に取る様に見える。又吾妻山は非常に近い距離にあるので家形山へは一日でゆつくり行ける。

△金峯山　矢作太郎　渡辺九郎

五月五日―九日

(一)飯田町へ在一、〇〇〇、〇〇〇）　(二)甲府へ前三、三五）―上黒平へ在二、〇五〇）

―伝丈沢へ六、二〇）―西山氏炭焼小屋　(三)小屋へ前六、二〇）―水晶峠へ八、五〇）―御室へ九、〇

〇）―金峯五丈岩へ在二、四五）―頂上へ一、〇五）―金峯、鉄鞍部まで行き積雪五尺に及び引返し、金峯頂上へ三、二〇）―金山へ七、四五）―増富津金掛へ九、四〇）　(四)大雨の為一日滞在、南

アルプス方面降雪あり。駒地獄、風凰、一ノ
一〇、三〇〇）眺望絶佳、南アルプス及び金峯方面の展望台の観あり一大豆生
まで自動車一韮崎へ三、三〇〇）一新宿へ九、四
一の為歩行頗る困難、為に奥秩父縦走中止の已むなきに到る。鞄カンジキを携行すれば可なり
しならん。

△初夏の大菩薩と小金沢　友田　勇

五月廿三日一廿五日

(一)飯田町へ行一八百一〇、〇〇）一大菩薩嶺へ一〇、三〇）一大菩薩峠へ
四〇）一峠小屋へ前四、二〇）一雲峯寺へ七、〇
谷へ五、二〇）一小金沢三角点へ百一二、五〇）一上日川峠へ九、
△日光より平ケ岳へ　松本謙三、　五十嵐教馬。

五月廿七日一六月一日

本備参照

△山岳部懇親会（石老山）

矢作太郎、浅泉重継、友田勇、高木英二、三井春男、近藤恒雄、北
村、赤堀太郎、秋村

友三郎、　吉沢一郎　湯浅武、

△西駒ケ岳　七月一日―三日

(一)仮田町(一〇、〇〇)―駒岳へ(前八、〇〇)―伊那小屋へ(六、三〇)―本岳頂上へ(一一、三〇)

二北より宮田小屋に至らんとせしが濃霧深く一瞬の切間に自分の位置を知り宮田小屋につく(細)昨夜の暴風雨の猛威もケロリと止み、ゾレネレ・リピトは糸の如く差込む青空にアルプの峯が連々大海をうねりの間には透徹した青空にアルプの峯が連々大海をうねらせてゐた―黒川発電所へ(一〇、三〇)―赤穂駅

七月初旬の西駒は確に!。急な雪渓のトラバース人も面白けし。晴れた日のアルプスの眺望は素的だ。山岡きの前がいゝだらう。小屋には人が居ないから。此の記が悪かったのでアブノーマルだからその積りで。

(二)伊那町(前八、〇〇)―内萱へ(一〇、四五)―駒岳一合目へ(一一、三〇)―伊那小屋へ(前八、〇〇)―駒ケ岳へ(一〇、〇〇)―濃ケ池への分(三)小屋へ前八、

△白峯三山と地蔵岳　小栗吉雄、　曽田荘太郎、

本編参照

△赤石山脈入り

七月四日―十二日

矢作太郎　渡辺九郎
案内者、吉下銀弥　外人天三名

(一)矢作渡辺より飯田町より吉沢伊那町にて一緒になる。
高遠へ八、五五)―平瀬へ一〇、三五)―荒川渡小屋へ六、〇(一五)―小瀬戸湯場へ一二、〇(四五)―悪谷へ一〇、〇(二〇)―大曲りへ三、五〇)
神子ケ渕附近は一番面白かった。(二)八幡町へ前八、〇五)―自動車にて(三)橋本屋へ前七、〇〇)―塩沢渡へ九、
(四)雨滑在(五)小屋へ前六、三〇)―南荒川の渡へ七、〇三)―大蒲へ七、四五)―雫
つた。
淡三本へ一一、四〇)―六百米の急雪渓の後這松に達すべ百二、〇〇)―南荒川岳小屋は約三疊敷位温か
晃岳へ三、一〇)―雨猛烈の中を塩見沢を降りて中
―三伏小屋へ七、五〇)―国境切明へ八、四五)―小河内岳小屋へ前一、五〇)―これより後は本号の矢作の書いた遭
の便使なき事を注意する。但し銀弥はいい。
△鳥帽子、槍縦走

七月五日―十六日　友田勇　増田俊夫
村瀬和四郎

(一)曇　大町へ前八、一〇)ー菊ノ湯へ一一、三〇)ー波小屋へ有三、〇五)

(三)雨・不動沢迄行　(四)晴　小屋へ前六、〇〇)ー三角兵へ一一、〇〇)ー鳥帽子小屋へ有二、三〇)ー南沢岳往復小屋着へ五、〇〇)　(五)雨滞在　(六)暴風雨滞在　(七)暴風雨滞在　(八)晴　小屋へ前六、〇〇)ー双六池へ九、三〇)ー穂岳へ有三、〇〇)ー三俣岳へ一二、〇〇)ー赤岳へ有三、〇〇)ー槍岳往復へ九、三〇)ー穂岳へ有三、〇〇)ー三俣岳幕営地へ有六、〇〇)ー高地　(九)晴　上高地へ前七、〇〇)ー徳本峠へ一〇、三〇)ー松本へ有四、〇〇)

△笠ヶ岳

松木謙三

火月四日

△蒸搦絞死　ー　記録無し。

一行　伊藤誠一郎、市村義一、高猶泰藏、推名時四郎　石津和一、西脇浩、津田秀雄、

リーダー　浅泉重継

矢野鎮夫、小牧速男

火月十三日ー十六日

(一)飯田町へ有一一、三五)　(二)晴　有明へ前九、三〇)ー中房へ有四、〇〇)ー燕小屋へ九、〇〇)ー燕岳往復へ一一、〇〇)ー西岳小屋へ有三、三〇)　(三)中房へ前六、〇〇)ー白沢渡へ七、三〇)ー上高地へ八、四五)　(四)晴　小屋へ前六、三〇)

一救生小屋へ九、〇〇)ー槍岳往復へ有一二、三〇)ー燕小屋へ九、〇〇)ー白沢渡へ七、三〇)ー上高地へ八、四五)

一部不良分子の工ゴな行動を除けば此の隊は充分な成功を收めたらうと。温和な多き浅泉氏

を斯の如き不良分子のリーダーとした事は使者選挙の返事ハ七手落ちであつた。（寺沢）

△蒸搶縦走　八月十四日―十七日

松倉岩采司外十五名

(一)飯田町（二）中房（前五、一五〇）―中房着へ宿四、〇〇〇）―一枚生小屋へ宿（大、一〇〇）―燕岳（前五、一五〇）―三角点へ八、〇〇〇）―一ノ木　冠木啓蔵　三井春雄　平野　茂野計蔵　村田好吉　上高地へ宿四、一五〇）

△立山より針ノ木　七月十四日―十八日

(一)上野駅へ宿七、〇〇〇）(二)晴、富山へ前七、〇〇〇）―称名滝へ宿五、〇〇〇）(三)温泉へ前六、五〇〇）―一千垣へ九、二〇〇）―室堂へ宿一、〇〇〇）―雄山温泉へ宿五、〇〇〇）―一雄山へ七、〇〇〇）―浄土へ九、三〇〇）―一ザラ峠へ一二、三〇〇）―一平山屋へ宿四、〇〇〇）(四)室堂へ前五、〇〇〇）―一針ノ木へ一〇、四〇五）―一大沢へ宿一二、三〇〇）―大町へ五、一五〇）

(五)小屋の一リーダー、吉沢一郎

△蒸搶縦走

一行　角田正義、宮野信介、池野勇治、佐藤正己、中島善一郎、奥山誠、浅井剣治、横倉吟三郎、手塚春雄、久保田礼治、林豊次郎、横山弘　上秋弘一、平井良一、高橋正太郎、高木秀夫、石橋琢治、大野隆治、松井喜代太郎、斎藤勤一、金田一郎　伊藤正治、

七月十七日ー廿二日

記録はほゞ浅倉氏と同じ故略す。

△霞沢岳六百岳縦走　　吉沢一郎

七月廿一日　　人天下川隆夫

清水屋へ前八、一〇〇)ー蒲へ(一〇、〇〇〇)ー遠へ(一二、〇〇〇)ー三本槍へ(石一二、五〇〇)ーキレット(二、五〇〇)ー北穂へ(一二、三〇〇)ー蒲へ(一〇、一〇〇)ー清水屋へ(前八、一〇〇)ー霞沢岳三角点二等へ(一一、〇〇一)ー霞沢岳三角点へ(一二、一〇〇)ー五千尺へ(一一、〇〇〇)ー六百岳三角点へ(石一二、三〇〇)六百岳三角点へ人天下川隆夫

此の縦走は骨折損の草臥れもうけ、六百岳はつまらない山、霞沢岳よりの眺望は忘れられない。

△上高地より霞沢岳、梁鞍岳、白骨へ、(松本営林署、食糧事務所、松本謙三、)

七月十九日ー廿日

(一)清水屋へ(前六一〇)ー霞沢岳へ(一〇、三〇〇)ー清水屋へ(二、三〇〇)ー平湯へ(石五、三〇〇)　(二)平湯へ(前五、一五)ー大滝へ(六、〇〇〇)ー梁鞍頂上(一、〇〇〇)ー小屋へ(二、〇〇〇)ー白骨温泉へ(石六、三〇〇)

△上高地より梁鞍へ　　吉沢一郎　小栗吉雄　夾竹春雄

七月廿三日ー廿五日

(一)上高地幕営地へ(一二、〇〇)ー中湯へ(二、三〇)ー(三)白骨新宅へ(前六、三〇)ー白骨温泉へ(九、三〇)ー頂上三角矣へ(一一、四〇)ー湯川への分矣へ(七、〇〇)ー製部小屋へ(一、三〇)ー(二)滞在小梁川、炭竹は島々へ降る。ー平湯着へ(五、〇〇)ー笹久保へ(七、四〇)ー小屋へ(二、〇〇)北処にて吉沢は一人平湯に向い、

△敏岳、針木峠

一行　春山・高木・赤堀　小島

リーダー　五十嵐敬吾

七月十八日ー廿四日

(一)上野駅へ(七、〇〇)ー(二)富山へ(前六、五三)ー芦峅寺へ(九、五〇)ー藤橋へ(五、三〇)ー別山乗越へ(七、〇〇)ー剱沢小屋へ(一一、三〇)ー(三)藤木屋へ(一一、三〇)ー平蔵谷下へ(五、二〇)ー剱頂上へ(一一、〇〇)ー(四)室堂へ(前四、一〇)ー大汝山へ(七、三〇)ー雄山へ(八、三〇)ー一ノ越へ(九、〇〇)ー室堂へ(前五、三〇)ー(五)室堂へ(前五、三〇)ー雄山へ(八、三〇)ー一ノ越へ(九、三〇)ー鬼王へ(一〇、〇〇)ー安峠へ(五、二〇)ー平ノ小屋へ(六、〇〇)ー(六)雨滞在ー針木峠へ(九、三〇)ー大沢小屋へ(一一、〇〇)ー大町へ(六、〇〇)

稼め通知して置かなかった為来内備入れに若干心せり。而も不良来内者の為一日は藤橋泊りとなる。注意すべき事なり。

(七)小屋へ(前四、二〇)ー牛小屋跡へ(七、三五)

△稍穂高縦走

記錄は本橋にあり　　小泉吾雄　来内　蒲田の前科者

△白山

七月廿九日ー三十一日　　吉沢一郎

金沢の村尾氏宅より鶴来へ行き、自動車にて白峯へ、徒歩白山温泉山田旅館・翌日白山往復。翌日金沢へ帰へるのだが、自動車の行つた道は面白くない。白山は名山ではあるがいゝだらう。要するに白山は Ausichicht ぢゃ。

△大兵名子・小兵名子を経て戦場ケ原へ　　渡辺九郎　外二名

リーダー

本橋巡照

△美ケ原　　矢作太郎

八月廿七日　晴

松本へ前九、〇〇)ー舟附橋へ一〇、〇〇)ー三城への分岐へ一一、四〇)ー石切場小屋ー王ケ鼻頂上へ一二、二〇ー矢へ一、五五)比辺はお花畑である。ー武石峠手前へ二、五〇)ー駒越へ四、一〇)ー松本へ六、一〇)

美ケ原はキャンプ旅行の好適地である。

△西駒ケ岳

八月廿九日ー廿日

矢作太郎

(一)上松(前八、五〇)ー王滝小屋(八、三五)ー本岳ー宮田小屋(八、四五)ー地図上にての記号ある所だ。一二、一五)ー二合目(一〇、三〇)ー小屋(発電所(二、三五)ー伊那町(四、一五)

九月十九日ー廿三日　商大開業五十周年紀念展覧会を開催す。

△白峯三山より地蔵岳へ、村尾金二、吉沢一郎

九月廿三日ー三十日

(一)飯田町発(前五、四五)ー青柳(六、五〇)ー七、五〇)ー出頂

茶屋(一二、〇〇)ー一二、三五)ー飴茶屋(二、三〇)ー甲府(四、一三、〇〇)ー西山温泉(五、三〇)

甲府から青柳までは乗合自動車で十五銭也。

時間がいゝと思はれるのは千二百米許りの上りを地図上では無視し勝ちだからだ。足馴峠とは源氏山から西にある村界尾根の鞍部。ここからは富士朝雲の間に地蔵鳳凰が望まれる。出頂までは案外無いさうだ。足馴峠とは去る宿駅の御命名だ。何となしに嫌な気がした。

るのにそんな簡単にやって貰ひたくない。

(二)晨夜雨　小屋(四合目昼食出発(一四、〇〇)ー駒飼ノ池ー濃ケ池ー将基乗小屋(一七、〇〇)ー小屋(発電所(二、三五)ー伊那町(四、一五)

(三)西山温泉へ(前八、三五)ー奈良田吊橋へ九、三〇)ームジナ坂へ(一一、〇〇)ー広河内を右岸へ渡る(一二、一五)ー小篭沢山師ノ小屋へ(三、四五)

ムジナ坂は雨池山から東南に延びてる尾根の西北へまた折れる処へ注ぐのがタル沢大度松の西南に出て、一七〇〇米附近で大門沢へ広河内上流へ流れるのが大篭沢、この日は雨と村尾が広河内を右岸へ渡る一本の丸木橋から勇敢にも水勢猛烈な中へ飛びこんでしまったのを干す為に小篭沢の小舎に泊る。西山から大門沢の小屋まで行く予定だった。

(四)晴少時雨　小舎(前八、三五)ー大篭沢へ(八、五〇)ー右の尾根へ(九、〇〇)ー再び河泉へ(一〇、一〇ー一二、〇〇)ー大門沢小舎へ(一、三五)

小篭から少し先は河泉伝ひにある。大篭沢が分れて五分も歩くと右へ尾根を行く道があり。少さい石が一寸積んであったが注意しないと通り過ぎてしまふ。地図の広海内とある「河」の字辺。再び河泉へ出る所は一、五〇の承辺、すこし登って上流右岸に大きい小屋は此の上にある。

(五)晴。小屋(前八、三五)ー右より大きい寺沢来る。本流は左へ(八、三〇)ー着へ(一二、〇〇)ー農鳥沢へ(二、五〇ー一三、二〇)ー両ノ俣小屋へ(四、三五)

大門沢の本流が左へ西南へ折れるのは地図の通り大河原しに入った一ら急な傾斜だ。真夏なら雪渓だらうが自分達の行つたのが秋の為に上までくになつてとてもも石の上は行けず右手の這松の商を分ける。上の方に多つた。そして出た所には大小二つのケイルンがあつた。小屋は小さいが二人には充分だつた。十五六人までは平気だらう。

六小屋へ前六、二〇)ー間岳へ八、〇五ー八、二〇)ー北岳へ一〇、五〇ー一一、五。)ー広河原小屋へ伯三、一〇)ー間岳へ八、〇五ー八、二〇)ー北岳へ一〇、五〇ー一一、五。)ー広河原小屋

屋から見える一番右の端を指して登りつめたら左の方へ行けば三角点ツア製の山の標だ。小深かつたらさで困る事だらう。自分達の時は晴れては居なかつたが敏の白く光つて見えたのは嬉しかつた。上州方面に也脚前のかぶる笠の形をした山は何だらうか。赤石山脈の峯々、八ケ岳、西駒連峯、乗鞍等々実にすばらしい眺望を得た自分達二人は幸福と云はなければなるまひ。間ノ岳から北岳を見ると一見登攀不可能の様だが一寸悪い所は上の方少しだつた。北岳から降りて白鳳会の道標を過ごして二人は大樺の北の出でおに広河原への小屋はすに大樺沢の野呂川口落ちる一丁韮崎の地図の野呂川とある「野」の字の処へ西南から注ぐ沢

(七)雨・広河原小屋へ前八、四〇)ー白鳳峠へ一二、二〇)ー高嶺へ一二、一〇)ーアカ又ケ沢の頭

〈一、一〇〉一北御室へ一、三〇一一二、五五〉一青木湾へ五、三〇〉白鳳峠の路出した道。峠は高燒の西北に当る二、五〇〇米の鞍部。北も降りた所。尚る道は小屋の対岸にある。ドンドコ沢の下りは踏跡を雨、鳥居峠一韮崎一東京。

此の全行程は別に珍らしくも無く、わざく書く程のものでもないが必要な所だけを一寸書いて置いた。

△中秋の八ケ

拾月三日一一五日　小栗吉雄。

本欄参照

拾月廿三日一廿六日　五十嵐教雪・松水謙三。

△奥上州へ

本欄参照

△奥秩父釜沢遡行。

拾月廿七日一拾一月一日　村尾金二　渡辺九郎　吉沢一郎

〈一一、三五〉一〈一二、三五〉(二)塩山へ前四、五〇〉一寒林寺へ六、三五〉一〈一〇一一、五〇〉一途中昼寝一ナレイ沢へ三、二〇〉一二股ノ小屋へ三、四〇〉(三)小屋へ前

六、三〇〇)ー(ゲスリ(八、三〇〇)ー河原(九、〇〇〇)
ー右俣右俣谿合(一、三五〇)ー野宿地(三、〇〇〇)
本ー小滝右を捲む一沢二本(一一、一〇〇)ー木賊山
賊山三角点(三、三〇〇)ー破風小屋(四、三〇〇)(五)小
破風(一〇、二〇〇)ー雁坂嶺三角点(一一、四〇〇)ー
ー将越山三角点南(一、四五〇)ー雁峠(二、三〇〇ー三
ー落合(一〇、一〇〇)ー柳沢峠(一一、一五〇)雨来ラ
二〇〇)

△秋の赤城、穂名へ、　高木英二、大高

十月廿三日ー廿六日

(一)上野(一二、二〇〇)　(二)高崎(前二、一七ー五、〇
長之郎(一〇、〇〇〇)ー大洞(二、〇〇〇)ー黒桧(四、〇
(三)大洞(前二、〇〇〇)ー渋川(三、三〇〇)ー伊香
(三)伊香保(六、〇〇〇)ー水沼(八、三〇〇)ー
△大菩薩より雲取三峯へ、　高木英二、近藤
十月三十日ー十一月一日　恒雄　中島嘉一郎　宇佐
美俊夫、

(四)野猪地(九二〇)ー伏
流(九、四五〇)ー沢二
信岳(四五〇)ー水
ガレ(二、二〇〇)ー甲武
角点(九、二五〇)ー東
ー右礼山(一、一五〇)
(六)高橋(九、四五〇)
〇〇)ー塩山駅(三、

(一)飯田町へ行一、三五)　(二)塩山へ四、五五)一大晋薩峠へ一一、〇〇)一円沢野村屋へ五、〇〇)一行程八里半　(三)丹波へ六、〇〇)一七ツ石へ一一、〇〇)一途中より引返し再び出発へ三、〇〇)一前白岩三角点へ四、三〇)一三峯神社へ八三〇)

此の行程を一日でやるのは少し強行だとは思ったが宿の主人の話では行けるとの事で決行した。但し雲取までは猟師を案内人として連れる事にさだめた。費用弐円へ食料不要)雲取三角点までの道は案外良い道だった。七ツ石の五六丁手前には径が二岐して居るがどちらでもいい。分岐に水があった。雲取手前二三丁の尾根の青梅街道の方から雲取へ向っての下った所には小屋があって水も少し下ればあると相だ。尾根を歩いて行くと三本の唐松があるので目標となってゐる。雲取頂上には猟師の假小屋があった。雲取より三峯まで四時間ばかゝるだらう。(四)景気に出で帰京。

東京商科大学一橋山岳部規則

（大正十四年十月現在）

第一章　名称及目的

第一条　本部ハ東京商科大学一橋山岳部ト称ス。

第二条　本部ハ心身修養ノ為真面目ナル山岳及びスキーノ研究ヲ為スヲ目的トス。

第三条　本部ハ東京商科大学構内ニ置ク。

第二章　組織

第四条　(イ)本部ハ部長ヲ戴ク。

(ロ)本部ハ部員及び賛助員ヲ以テ組織ス。

せるものを部員とし、一橋関係者にして本部の事業を援けるものを賛助員とす。

第三章　役員

第五条　本部に左の役員を置く

各科委員　三名　庶務幹事　一名

記録幹事　一名　会計幹事　二名

第六条　役員ハ部員の互選によりて
第七条　賛助員ハ選挙に参与するを得ず。
第八条　役員の任期ハ一ケ年とし、四月一日より翌年三月廿一日に至る。
第九条　役員ハ役員会を組織す。
第十条　役員ハ役員会の同意なくして辞りに辞任する事を得ず。
第十一条　役員ハ其の事務に関し相互扶助を原則とし、本部の責任ハ全部員に於て連帯なるものとす。

第四章　集会

第十二条　集会を分ちて大会及び役員会とす。
第十三条　大会ハ毎年秋季に一回之を開き、本部の状況を報告し、其他重要ある事項を評決す。但し必要ある場合ハ役員会の決議により臨時大会を同く事を得。
第十四条　役員会ハ本部に関する重要事項につき評議する本部の中枢機関とす。但し一般部員及び賛助員ハ役員会に出席し、意見を陳述する事を得。

第五章　事業

第十五条　本部ハ第二条の目的を達する為、左の如き事業を行ふ。
(イ)　冬季及び春季の休暇を利用して又キー練習会を開く。

第十六条　其都度参加者を掲示により一箇会々員より募集す。但し部員賛助員以外の参加者よりは参加申込金を徴集するものとす。

(ロ)部員及び賛助員は本部備付の各異及び図書を無償にて利用する事を得。

(ハ)本部八毎年一回機関誌を発行す。部員及び賛助員には無償にて頒布す。必要に応じ別に印刷物を発行する事あるべし。

第十七条　旅行地調査の依頼に応ず。

第十八条　部員賛助員のみならず広く一箇会々員の為に登山及び入キャンプに関する質問及び旅行地調査の依頼に応ず。必要なりと認めらるゝ事実八役員会の決議により随時之を行ふ事を得。

第六章　会計

第十九条　部員八部費として毎月金五十銭を各月末までに納付する事を要す。但し三月及び八月八之を除く。賛助員八毎年金三円以上納付すべき権利を有す。

第廿条　部員申込者八入部の時入部金として金二円を納付する事を要す。但し入部申込者八　部員一名の紹介を要す。

第廿一条　経費八すべて予算による。予算の編成八毎年の初めに於て本部の会計收支決算及び本部機関誌上に於て之を報告す。

第廿二条　中途入部申込者ハ入部金の外に当該季期最初よりの部費を納付すべし。

第廿三条　有志より寄贈せられたる金品ハ役員会の決議により之を処分する事を得。

第廿四条　補則

第廿五条　部員ハ旅行記錄を其都度当該幹事に提出する事。

第廿六条　部員又ハ賛助員たるの決議により除名又ハ相当の処分を受くべし。

第廿七条　左の一に該当するもの八部員又ハ賛助員たるの本分に背くもの。

(イ)本部々費の滞納弐季期以上に及ぶもの。

(ロ)部費の納付に対して八世日以上の期間を定めて催告する事を要す。

前条六項に該当する者にして催告を経る事を要す。

本部規則の修正八役員会の決議を要し、更に大会の承認を経る事を要す。

（以　上）

△役員及び部員（大正十四年十月現在）

部長　東京商科大学豫科主事　敏腹木村惠吉郎

庶務幹事　小栗吉雄（本一）

記錄幹事　吉沢一郎（本一）

会計幹事　淺原重継（本一）

近藤恒雄（予三）

各科委員　本科　松倉榮司（本二）

予科　冠木啓藏（予三）

專門部本、竹春雄（專三）

部員

（本三）中川孫一、金田近二

（本二）松本重男、松倉榮司

（本一）五十嵐敎馬　友田勇、小栗吉雄、渡辺九郎　川口又男、吉沢一郎、永田義男

曽田莊太郎、中島潔、村尾金二、村瀬和四郎、矢作太郎、松本謙三、淺原重継

坂島文雄、湯淺武、三富福之助、矢山秀吾、

（專門部）木堀太郎、秋村友三郎、夾竹春雄

（予三）冠木啓蔵、高木英一、三井春雄、
（予一）中島嘉一郎、浅井銳次、奥山誠　横倉吟三郎
（以上）

編輯後記

三年前だ！！！　同好者が集つて、あの忌ひ出深い今のA教室あたりにあつた参生集会所の機ら しい二階の隅でわが山岳部が孤々の声をあげたのは。其の当時は一稍山岳会と称してほんの五六人が集つてたゞ夏の山に登つて嬉んで居たに過ぎないものであつた。僕なども当時は常念山脈を縦走させてもらつて大アルピニストになつた積りで大いに気分をあげたものだつた。古い文句だが月日の経つのは早いもので、もう三年をへて当時の創立者金田・中川両氏の如きは角帽の狸となり、自分等も押上げられてやつとの思ひで四角な帽子をかぶり得る称に至つた。先輩奥野氏は今は会社に務めて昔の坊主頭は見る影もなく、めつきり紳士となつて時間の餘裕なきをかこつて居られる。三年の間に山岳会は山岳部となり・はじめは野次気分で入つて居た者連もどんく脱会して了い、今では真に山を愛する人々のみ残つて部のグルンドは益々強固ならんこして居る。此の間真面目なる研究者によつて登られた山々は数限りなき自分等は考へた末、わか校は本科・予科・専門部の三科になつてゐる関係上部員相互び顔を合

せてゆつくり語り合ふといふ事が出来ないので何とかして自分等の行つた山々の様子を話もし又人の話も聞ける様な落ちつく事の出来る場所がないものかと色々と物色して見た。震災前なら話も早いがバラックの今では中々新しい部に貸す様な所はなかつた。それに商賣人根性を出す奴等が居るので旨く行かないのも無理ない事だつたらう気分があつて嫁に行つた習字の室を少し割いて貰つた。それで貰つてしまふと一楠会とか称するもの、お偉いらしい方々が何かと文句を云つて来た。そこで貰つてしまさう。

今まで二人三人と放浪してゐた部員も此の様になつたのであるから。会員の催促も旅行の計畫も皆がいつも顔を合せてるので誠に行ひ易い。然し自分等はまだ物足らぬ気がして居た。といふのは専門部はいゝが予科は部井といふ田舎にある。そしてお江戸の真中へ出て来るのは一週に一夜だけ。それに予二は一度も出て来ない。これでは部の発展上非常に差つかへる。茲に於て何か雑誌の如きものを発行したらといふ衆が出る様になつた。併し其の時は出したいのは山々であつたが先立つものは例により金なのだ、これが部には一文もない。山岳会時代の残金は大枚弐拾参銭、これではどうにもならない。一楠会から入る補助金だつて圣の何とか同窓で総てこれ創業費と支つてしまつて居た。其処で此の四月から部費を毎月五拾銭づゝ取る様になつたのである。

の熱心なる助け、殊に会計幹事浅泉氏の努力により今では雑誌を出す位なのである。理想の一部は遂せられたのである。然しまだである。前途は長い。なあんだプリントかなと云つて笑れるな。此の貧弱な内容はいと云つて笑れるなのだから。但分等は益々努力して居る。後二年しか学校に居られないかと思へば思ふ程倭等の努力は実剣味を帯びて来るのである。次号はより以上立派なものを作つて見せる。というか前途ある予科専門部の諸君よ、必ず此の部をより以上向上させる様努力して呉れ給へ。

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

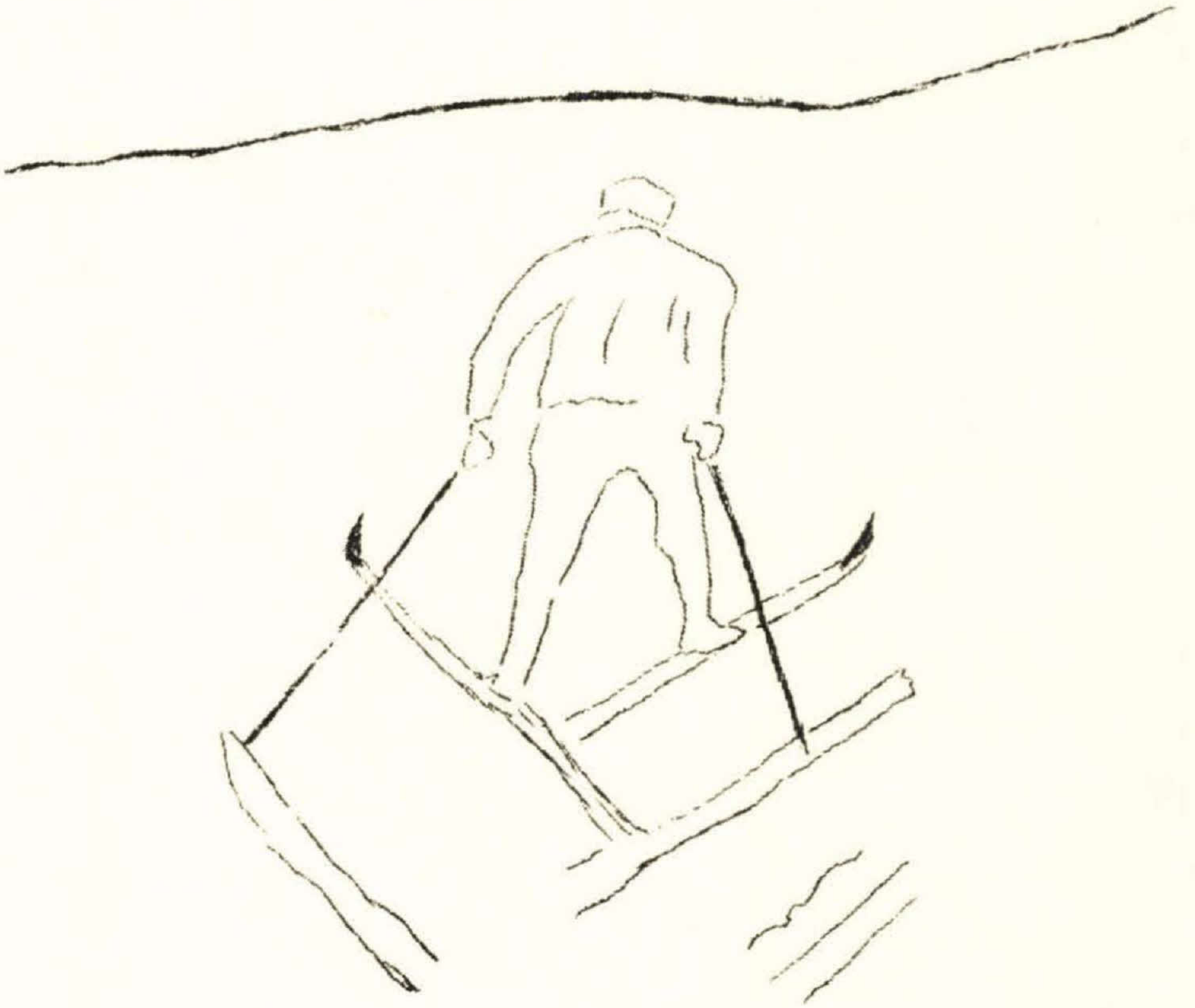
『針　葉　樹』第１号　復刻

昭和60年７月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会

編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　(株)　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７



いざ行かん哉!!

純白の粉雪の上に
新しき一筋のシュプール
レルヘンタンネの炎の端より
ハイルを味ふスキーマンの
煙草(シガー)の烟が漂つて来る。

野沢の天地

いざ行かんかな
粉雪の上に。

:SKI HEIL:

